912.6-Mo55-2ウ
1200500757164
912.6
Mo55
2

濤怒

森本薫著

文學新輯
2

小山書店

始

19.11.16

912.6
Mo55
2

新學文叢
—2—

怒濤

森本薰著

小山書店

滿怒

1908
12

登場人物

北里柴三郎　研究所員　一
妻　富子　同　二
娘　善子　同　三
長谷川泰　看護婦　小森
梅本清作　野々宮
喜多一郎　佐々木
相良知安　古川
娘　ふみ　梅本の妻　貞子

第一幕

芝愛宕町、北里家の座敷。

明治廿五年十月。夜。

家具裝飾は簡素。（これは再出の場合ぐつと豐かになる感じ）廻り縁に庭がみえる。

月明りの座敷に木綿紋服に佛書を懷中した長谷川泰が一人、ぽつんと腕を組んで座つてゐる。

風の音。

間。

縁を廻つてランプを手にした富子が出て來る。長谷川に氣がついて瞬間ぎよつとするが。

富子　まあ厭ですわ長谷川先生。びつくりいたしますぢやございませんか、そんな所にだまつて座つていらつして。

長谷川　いや。さんざ呼んだのだが返事がないものでね。上り込んでしまつたものだから今更歸るわけに行かずさ。

富　子　あら。納屋にゐたものでちつとも氣がつきませんでしたわ。大變失禮致しまして……。

長谷川　いやあ。でも留守でなくてよかつた。この家は町中のくせにいやに虫の聲がしますね。

富　子　裏が芝公園にすぐ續いてゐますから。叢の多い所爲でございませう。

長谷川　さうですか。すぐ裏がね。書いて貰つた地圖と首つ引で來たものだから氣がつかなかつた。

富　子　北里は公園が大變氣に入りましてね、朝起きると公園を一廻りして來ないと食事が出來ないんでございますよ。

長谷川　一人ですか。

富　子　ふふふ。

長谷川　やあ。こりやつまらんことを聞いてしまつた。

富　子　あら私そんな……。

長谷川　まあ〳〵いゝですよ、私ですからね。しかし若いな。いくつだつたかな。

富　子　四十一。

長谷川　ほう。さうはみえんなあ。若い〳〵。

富　子　自分の身體は頑丈そのものだ。物心ついてから藥をのんだことがない。ぶち殺されても自分は死なない。さういつて威張つてをります。

長谷川　まつたく健康そのものだ。生命力と意慾に眼を輝かしてゐますよ。あれぢや日本の學界は蜘蛛の巣の張つた空家みたいでぢれつたいだらう。どうです、新家庭の味は。

富　子　（笑つて）とんだ新家庭で……。

長谷川　七年振りでせう。新家庭のやり直しみたいなものぢやありませんか。

富　子　……妙ですの、何ですか。始終爪先立ちでゐないと見失つてしまひさうで。

長谷川　破傷風の純粋培養に成功したといふことはそれだけでも大變なことだが、もつと大きなことはその毒素を用ひて梅毒血清といふものに思ひ及んだことです。われ

われにとつてもあの男は、ちよつと他所見をしてゐると見失つてしまふ人間ですよ。

富子　學問上のことなんか、私にはわかりませんわ。離れてゐた間が長かつた所爲でせうかしら。嫁入りして翌る年に獨逸へ留學して……その間に私のしたことといつたら、善子を生んだことゝ、あの人に手紙を書いたことくらゐでたゞうろ〳〵してゐたのですもの。

長谷川　お嬢さんは、隨分可愛がりますか。

富子　機嫌の悪い時は、そんなことといつてわかる筈ないのにと思ふやうに怒鳴つてゐます。その代り可愛がる時は底拔けで、子供には結構それで均衡がとれてゐるやうでございます。

長谷川　おやすみですか。

富子　善子でございますか。先程まで大はしやぎで騒いでゐたのですが……。

長谷川　いや、御主人ですよ。

富子　あら、御一緒ぢやなかつたのですか。

長谷川　ゐないんですか。

富子　私立衛生會の委員會のやうなことを申してをりましたが。

長谷川　確かにさうなんですかね。會場へは現はれませんでした。」

富子　まあ。

長谷川　衛生會は見限られたかな。

富子　それぢや、今時分迄何處を歩き廻つてゐるのでせう。」

長谷川　……。どうも、ちよつと見當がつき兼ねますな。

富子　さういへば、この頃ちよい〳〵行先をいはないで出てゆくことがあるやうですけれど……。

廻り縁の奥から助手の梅本清作。

梅本　奥さん、ぢやひとまづ私……。（長谷川に）あ、いらつしやいまし。

長谷川　やあ、仕事かね。

梅本　はあ。（富子に）二號は大分熱も高いし、それに浮腫がきてゐますからひよつとすると駄目かも知れません。一號だけは何ともありません。注射部位に炎症もない

やうです。

富子　日誌に書いて下すつて？

梅本　はあ。明日迄どうといふこともありますまい。先生がお歸りになつたら一遍覗いてみて戴くと尙安心ですが。

富子　御苦勞樣。まあ少し休んでらつしやい。お茶でも淹れます。

梅本　はあ……。

富子　（長谷川に）ちよつと失禮を。

長谷川　どうぞもうお構ひなく。私はもう失禮します。

富子　でもまあ、お茶くらゐよろしうございませう。（去る）

長谷川　何をやつてゐるのだね。

梅本　ヂフテリヤの血淸を造るんださうです。

長谷川　もう初めてゐるのか、そんなものを。

梅本　奥さんが、嫁入り道具の箪笥と着物をお賣りになつて緬羊を三匹買はれまして

ね。裏の納屋を改造して、研究室と緬羊の小屋にしました。先生と奥さんと私

と、四日がゝりでトンカチやりましたが、大變な研究室ですよ。

長谷川　その緬羊の小屋へは奥さんも出入りしてゐるのかね。

梅本　何が面白いんですか、奥さんが一番出入りが激しいくらゐでせう。

長谷川　ヂフテリヤの免疫か。ちよつとの間も休まない。油斷のならん男だな。

梅本　病氣の流行の方がもつと油斷がならないんぢやないですか。この二三年續いての傳染病騒ぎはどうです。そのくせ對策といつては何も立つてゐない。うちの先生が一人でいくら騒いでも傳染病を專門に研究する機關なんて出來さうにもありませんからな。

長谷川　私立衞生會で政府に建議案を出してゐるぢやないか。

梅本　しかし、衞生會で實現出來る仕事と云へば、先生が歸朝なすつた時の、旗行列くらゐのものでせう。

長谷川　おい〳〵。ひどいことをいふな。

梅本　それに、そんな騒ぎの後だけに今の先生は一層みぢめですよ。外國人の前例を破つてプロシヤのプロフエツソルの學位を受けた。世界的の大學者だ。まるで凱旋

將軍を迎へるやうにお祭り騒ぎかと思ふと、後は誰も見向きもしない。相變らず内務省の一等技手で研究室もなし、持つて歸られた菌種や實驗道具は何時迄經つても荷造りしたまゝで二階の物置きに放つてありますからね。

長谷川　近頃時々からして家を開けるさうだが、何處か決つて行く所でもあるのかね。

梅本　さあ、そんなことは知りませんがね。私が先生だとしても、時々家ん中なんかにぢつとしてゐられなくなつてくるでせうね。こんな間にだつて、コツホ研究所ぢや、先生と机を並べた同輩が何んな大きな仕事をしてゐるかもしれないんですもの。

長谷川　あの男は十年早く生れすぎたよ。人間の病氣が外からの細菌によつて媒介されるといふ考へはパスツールが初めて思ひついたもので、それからやつと廿年經つか經たないかだ。コツホはパスツールの思想を具體化してみせたが、まだ〳〵ヨーロッパにさへ論敵が一杯ゐるのだ。それに日本では政府が傳染病研究所をやる爲には議會の協賛を經なければならん。

梅本　文部省でも帝國大學の中に傳染病研究室の設立案を出したさうですね。

長谷川　そんな話もきいたな。

梅本　それなら初めに先生が研究室を一つ借りたいと申し込まれた時に何故大學は斷つたのでせう。

長谷川　そりや、室が一杯で使へないといふのだつたらう。

梅本　消息に通じた人はうちの先生が獨逸にゐる時分、緒方正規教授の發見された脚氣病菌をたゞの葡萄狀球菌だと抹殺したので、帝大派が根に持つてゐるのだといつてゐますよ。

長谷川　もう止せ。北里の身内の衆がそんなことをいふのは却つてひねきのひき倒しだ。北里の爲に悪いだけだよ。

梅本　……。さうですね。止しませう。

長谷川　そんなことより、儂には心配なことがあるんだ。米國のペンシルバニヤ大學から、ブルツクリン、ボルチモアの兩病院から細菌學研究の指導に來てくれと呼び

梅本　へえ、そんなことがあるんですか。

長谷川　知らないのか？

梅本　知りません。

長谷川　衛生會長の長與專齊先生にさう話したさうだ。研究費は年額四十萬圓で別に年額四萬圓を北里の報酬として出さうといふらしい。

富子　富子茶を淹れて持つて來る。

長谷川　粗茶でございます。

富子　やあ、どうも……。（呑む）

長谷川　大分風が出て來たやうでございますね。

梅本　もう秋も暮れですからな。又寒くなりますよ。

富子　奥さん、アメリカからうちの先生に來てくれといつてきてるさうですが……。

梅本　あら、そんなことがあるんですか。

長谷川　ぢや、奥さんも御存知ないのだ。

……、（湯呑みを置いて）こりや、待つてゐても果てしがないから私はこれで失禮します。いたゞき立ちで……。

富子　まあ先生、よろしいではございませんか。まだ早うございます。

長谷川　いや、明日の朝は又早いんでね。どうも私塾の教師なんてものは仲々これで……。（立上る）

富子　さよでございますか。大變失禮いたしまして。

梅本　御免下さい。

長谷川　あ、そのまゝ〳〵。御主人が戻つてみえたら、ちよつと私が來たと仰言つて下さい。明日にでも又やつて來ますが。

富子　は、さう申し傳へます。

と、いひつゝ出て行く。梅本一人殘り緣の方へ出てゆく。富子入つてくる。湯呑茶碗を片づけながら、ふと考へ込んでしまふ。

梅本　長谷川先生は何時逢つてもあのおんぼろの紋付を着てゐられるが、他に着換へは持つておられんのですかな。

富子　……。

梅本　大多數の人間は寄生虫である。自分は寄生虫に恩惠を施すのだ、といつて虱のた

かつた着物を平氣で着とられるさうだが。あれが醫者で代議士で濟生學會の塾頭とはちよつと見た所わかりませんな。

富子　北里は、アメリカへ行くつもりでせうかねえ。

梅本　さあ。

富子　私にはそんなことは毛ほども口に出しませんでしたけれど……。

梅本　魅力でせうなあ。研究費年額四十萬圓。完全な設備と科學の檜舞臺と。日本の學會に先生を容れる餘地がないとすれば結局そんなことになるのかもしれない。その方が先生の爲にも學問の爲にもいゝぢやありませんか。

富子　……。ひとことくらい、ねつて下すつてもいゝと思ひますわ、それほどの決心をなすつてるんなら。

梅本　（默つて、富子の方をみる）

北里　表で急に騷がしい聲。

富子　おい！　おい、富子！　今戻つたぞ。

北里　あ、お歸りになつた。一足違ひね。お逢ひになつたかしら……。（と立上る）

北里、可成り醉つて、仲居姿の相良ふみの手を引っ張り、入つてくる。

北里　さあ。お入りなさい。いいんだよ、遠慮はいらん。ここは俺の家だ。ここで遠慮してゐちや俺のゐる所がなくなつちまふ。はは。

富子　お歸りなさいまし。

北里　やあ。あのね、お客樣を連れて戻つた。大事なお客樣だからな。たのむよ。これはね、家内です。

富子　いらつしやいまし。

ふみ　こんな時分にお伺ひして失禮いたします。あんまりお醉ひになつてらつしやるもので、つい……。

富子　わざ〳〵お心附けでおそれ入ります。

北里　おい〳〵何だしかつめらしい。止せ〳〵。（ぶつんとしてゐる梅本に）おい梅本、この人を知つてゐるか。

梅本　知りませんね。

北里　知らん？　ぢや、かういつたらどうだ。相良知安といふ人を知つてゐるか。

梅本　知りませんね。

北里　また知りませんか。相良知安を知らんやうぢや梅本清作もまだ〳〵一人前の細菌學者に遠いぞ。

ふみ　先生、私これで……。

北里　いや。いかん。（ふみの手を押へて）お嬢さん、この男はこんな無愛想な顏をしてゐるが、これで桂園派の歌詠みなんですよ。私の助手でね。許婚者がゐるんですよ。これも歌を詠むらしいんです。この方は新派でね。金がないんでなか〳〵一緒になれんらしいのですよ。金は私にもない。しかし金が何です。何でもありませんよ。われ〳〵には理想がある。これが生命ですよ。さうでせう。ねえ。（と ふみの手を振り廻す）

富子　あなた、そんなことなすつちゃ困つてらつしやるぢやありませんか。

北里　あ。はは。さうだ。失敬。しかしな富子、この婦人は只の牛屋の女中たあ違ふんだぞ。日本に獨逸醫學を移入した草分けともいふべき相良弘庵先生の娘さんだ。その娘さんが太田の女中をしとる。情ないとは思はんか。

梅本　私は北里柴三郎先生が今日のやうに泥醉してをられるのをみる方がずつと情ないと思ひますね。

北里　何故だ。俺だつて呑みたい時は呑む。歌ひたい時には歌ふ。お前みたいにしんねんむつつりしとつて世の中一體何が面白いんだ。少し酒でも呑めよ。

梅本　先生。緬羊第二號に浮腫が出ました。熱が三十九度ほどあります。殘念ですが、あれはもう諦める他ありますまい。

北里　ああ、緬羊の話か。俺は人間の話をしとるんだ。梅本、大事なのは人間だよ。學は元人にありだ。これが根本さ。こいつを忘れて何の文明、何の進化ぞやといひたいよ。俺はコッホ先生の所で破傷風菌の培養をやつたが、なにこれだつて最初から確固たる勝算があつてやつたわけではない。俺を憤起させたのは「傳染病彙報」にのつたフリユツゲ教授のレポートだ。「テタヌス菌は、之を分離して純粹に培養し得べきものでなく、他の菌と共棲的に初めて培養し得るものである。之を吾人はジンビオージスと稱へるべきである」……これが眞理ならコッホ先生の學說は一朝にして覆へるのだ。培養し得べき菌にして純粹培養の不可能なる菌は

ないといふ說がね。俺は斷然破傷風菌を純粹に培養してみようと思ひ立つた。コッホ先生の爲にだ。さういふもんだ。相良先生にだつて弟子は澤山ゐる筈だ。初めて帝國大學を本鄕の加賀屋敷に築かれた人だ。その功績ある人が辻易ひをして新錢座の裏店に住み、お嬶さんが牛屋の女中になる、といふ世の中かね。（ガックリなる）

富子　あなた。あなた、お苦しいんですか。

北里　いや。なんでもない。俺は昔、どうしても軍人になりたいと思つたんだ。大阪に陸軍の兵學寮が出來て各舊藩に向つて子弟を募つてゐた。俺は新式の兵學を學んで將來馬上に三軍を叱咤せんことを熱望したんだ。すると親類共がうるさくいひ出した。長男だからいかんといふのだ。父祖傳來の田畑を荒廢せしめるとは何事だといふわけさ。仕樣がないから俺、長崎に出て勉强したいと申出た。親爺は、長崎に行かせる代り醫學所に入つて醫者になれといふ。さあ弱つたよ。醫者と坊主は手足を揃へた一人前の人間のすることぢやない。俺あさう思つてたんだからな。弱つたよ。まるで藪蛇ぢやないか。醫者か。ははは。（又ぐつたりなる）

富子　あなた。こんな所でおやすみになつちや風邪をひきますよ。あなた……。

北里　（うるささうに手をふる）

富子　（ふみに）ほんとに御迷惑でございましたでせう。こんなになつた人をわざ〳〵お送りいたゞきまして。

ふみ　いゝえ。私がつまらない愚痴を申上げたばかりに、却つて先生をこんな風にしてしまつて……。

富子　太田さんへは、時々參るんでございませうか。

ふみ　いえ。……いらつしやるかもしれませんが、私がお給仕致しましたのは初めてで……いつかの旗行列の日に通り合せて北里先生と存じ上げてゐるもので、つい父の恥なんか申し上げてしまつて……。

富子　御苦勞なさいますのね、あなたも。

ふみ　私は苦勞とも何とも思つてをりませんの。身體が丈夫で毎日元氣に働いてるんですもの。

梅本　うちの先生は相良先生に習つたことはあるんでせうかね。

ふみ　こちらの先生が大學にいらつした頃にはもう、父は止してゐた筈でございますわ。

梅本　すると、あなたの御父上とは全然面識が無いわけですね。

ふみ　先生は、どうしてももう一度相良弘庵を再起させなくちやならない。それがお國への自分達のつとめだと仰言るのです。人を容れることも狹く、人に容れられることも薄かつた人が思ひもよらない所に味方がゐるのですもの。うれしいと思ひましたわ。

富子　ほんとですわ。そんな立派な方がそんなお氣の毒なことつてありませんわ。私達には何の力もございませんけれど、でも私達に出來ることがございましたら……。

ふみ　私は今日迄日蔭々々へと廻る草の蔓のやうに暮して來たと思ひます。でも明日からは日向へ〳〵と出る花のやうに生きて行きたいと思ひますわ。先生にはたつた一晩で、世の中が變るほどたくさんのことをしていただきましたもの、これ以上にお願ひしたいことなんてございませんわ。では、これで……。

富子　まあ、折角いらつして下すつたのですからもつとお話してらつしたら……。

ふみ　でも、遲くなりますといけませんから……。

富子　左樣でございますか。本當に恐れ入りました。申し譯ございません、お茶も差上げないで。

ふみ　ごめん下さい。

富子　梅本さん。その邊迄お送りして下さいませんか。

ふみ　よろしいんでございますよ。送つてきて送られては何のことかわかりませんもの。

富子　でも、公園の中は暗うございますから、女一人では……。

梅本　一緒に行きませう、その邊まで……。

北里　三人出てゆく。間。富子一人戻つて來て、夜着かなんか北里にかけてやる。

富子　（ふと顏を上げて）おい。緬羊第二號が熱が出たつていつたな。

北里　はい。

富子　何時頃からだ。

富子　夕方、六時頃でしたか……。

北里　お前又緬羊の小屋へ入つたんだな。

富子　いえ。入つた、といふわけではありません。たゞ傍を通つたら……。

北里　嘘をいへ。

富子　でも、私が氣をつけなければ二號の發熱してゐることわからなかつたかもしれませんわ。

北里　八時には梅本がちやんと見に行くことに決つてゐるぢやないか。まあいい。すんだことは仕方がないのだからこれからは氣をつけなさい。（急に起たうとして、よろめき座り）日誌を持つて來てくれ。

富子　はい。（急いで去る）

北里は長谷川の去つた後に片附け殘つてゐた茶を土瓶の口から呑む。

富子　持つて參りました。

北里　うん。（讀んで）九月九日三十瓩。十四日五十瓩。十八日八十、二十三日……。もう抗毒素が出來てゐていい筈だが……。（しばらくみてゐて、そのまゝ放り出して又

轉ってしまふ）

富子　先刻長谷川先生がいらつしやいましたけれど。

北里　う……。何しに。（ねたまゝ）

富子　御用は別に仰言いませんでしたわ。

北里　今日の會に行かなかつたのでその話でもしに來たのだらう。

富子　さうかもしれません。あなたがアメリカへいらつしやるつもりかどうか、氣にしておいでの樣子でございました。

北里　……。

富子　あなた、お出でになるおつもりなのですか。

北里　いいや……。

富子　どうしてですの。いらつしやればよろしいぢやありませんか。

北里　いいんだよ。

富子　でも、お仕事はあなたにとつて命なんでせう。

北里　或意味では、命より大事かもしれない。

富子　そのお仕事が日本にゐては出來ないのでせう。內務省の衞生局でしようとすれば、コレラや赤痢のやうな危い病菌を一緒に扱つては困るといはれるし、大學の方では部屋がふさがつてゐて借せないと斷はられるし、私達には自分の力で研究室をつくるお金は無いし。それが向ふへ行けば何から何迄ちやんと出來てるんでせう。

北里　そりや、喉から手が出るほどのいい條件さ。俺がコッホ研究所で最初に貰つたアルバイトといふのが、コレラ菌は乾かしてどの位の間生きてゐるかといふ試驗なんだ。コレラ菌を培養していろんな日數を經たものが十五種ある。その各種を絹糸に塗り、硝子板に塗つて三十種になる。こいつを一つづゝ肉汁の寒天に植ゑるとそれだけで六十種になるのだ。すると今度はその一組をシャーレーに入れて室溫に乾かし、一つは硫酸乾燥器に入れる。もう一つはシャーレーの中に入れてその上に濡れたガーゼをかけておく。これが三組だから百八十だ。それを調べるのには一時間二時間三時間といふ風に十時間迄は一時間毎にやらなくちやならん。一時間に百八十遍培養するといへば一分間に三つ植ゑなくちやならんのだ。これ

はもう煙草を喫ふひまもありやしない。人間が細菌を調べてゐるのでなくて細菌が人間の能力を調べてゐるやうなものさ。こんな簡單なことにさへこれだけ繁雜な手數が要るんだ。これから俺のやらうと思つてゐる仕事にはもつとたくさんな人手と資力が要る。裏の納屋なんか改造したつて何程の仕事が出來るものかと時時莫迦々々しくなることもあるんだ。

富子　私や、子供のことを心配して下さるんだつたらいいんですのよ。私何時迄でも待つてゐますわ。一緒に來いと仰言るんなら、外國へでも何處へでもついてゆきます。土地が變れば子供を育てるのもむつかしいでせうけれどそんなこと何でもありませんわ。あなたが仕事と戰爭なすつてらつしやるんですもの、私も土地に負けないやうに子供はちやんと育てますわ。

北里　いいんだよ。いいんだよ。お前はそんなことを心配しなくつたつて……。

富子　だつてあなた。それぢやあなたは手を拱いて身を亡ぼすやうなものぢやありませんか。

北里　さうなんだ。俺は手を拱いて身を亡ぼすのだ。

富子　まあー　そんな……捨鉢みたいなこと仰言つて。

北里　莫迦！　俺が自棄や捨鉢で酒を呑んで廻つてゐるやうにみえるか！（間。起き直つて）……お前も知つてゐる通り俺が内務省から獨逸に差遣された最初の期間は三年間だつた。その期間が切れた時、俺は破傷風の仕事にかゝらうとしてゐたので、内務省に泣きついてどうにか二年延期して貰つた。その二年が過ぎようとした時、俺のやつてゐた仕事はツベルクリンだ。これはコッホ先生にとつて恐らく畢生の仕事になる筈のものだつた。俺も中途で捨てたくない。しかし役所の規則としても經費からいつても二度も期間を延長することは絶對に出來ない。先生も俺も、その時自分のことのやうに奔走しくれた西園寺公使もまつたく途方にくれた氣持だつた。その時だつたよ。恐れ多いことだが皇室の特旨を以て壹千圓の恩賜金を賜るといふお達しを戴いたのは。俺はその時のことを思ふと今更アメリカへ渡つてアメリカ人の資本で仕事なんか、ちつともしたいと思はんのだ。

富子　アメリカでなすつたつて日本人が仕事をすればやつぱり日本の爲になるぢやありませんか。私はちつとも違ひはないと……。

北里　違ふ々々。俺の細菌學は獨逸で仕入れてアメリカで販賣する教室學問ぢやないんだ。そんなものには俺は何の興味もない。俺の仕事は、この日本で、組織的な傳染病對策を確立することだ。病理と防疫と豫防と、この三つが揃つて初めて細菌學は日本にとつて有用の學問になるのだ。しかもこいつをやれるのは日本廣しと雖もこの北里をおいてないのだ。その俺のやつてゐることが毎日碌々として時を空費するだけだ。これはお前、一掬の酒杯に値しない事實だと思ふかね。

富子、呆れてゐる。

表の方でがら〳〵と車輪の音と馬蹄の音が近づき、止る。

梅本、入つてくる。

梅本　先生。三田の福澤さんが先生に玄關迄出て貰ひたいさうですよ。」

北里　三田の福澤？　福澤諭吉か。

梅本　さうのやうです。表に馬車を留めて待つてゐます。

北里　福澤諭吉が俺に何の用だ。

梅本　それはわかりません。一言ですむのだと仰言つてゐます。

北里　……。

出て行く

富子　お客樣ならちよつと片づけなくちや。梅本さん、すみませんけど手傳つて……。

梅本　大丈夫ですよ。上りやしません。今夜は通りがゝりではあり、遲くもあるからといつて御當人は馬車におさまつて出て來さうにありません。

富子　福澤さんつて、時事新報の。

梅本　さうです。獨逸の學界のことで社說でも書くんで訊きに來たんぢやないですか。

富子　ねえ。玄關で失禮ぢやないのかしら。お上げしなくちや。

梅本　いいですよ。さう氣を使はなくたつて。向ふの用ぢやありませんか。どら、私もそろ〳〵失敬します。

富子　さうですね。遲く迄すみませんでした。さつきの女の方何處迄送つて？

梅本　なに、この裏迄行つたつきりです。

富子　まあそれぢやあなた。

梅本　當人がいいつていふんですもの。無理に送ることもないでせう。やつぱり醫者の娘ですね。うちの先生が研究所でもお持ちになつたら、何とかして使つて貰ひたいなんていつてました。

富子　さうなればいいけれど、あまりうまいことは考へずにおきませう。

馬車の動き出す音。

富子　あ。お歸りになる。

と耳をすます。北里、飛ぶやうに入つてくる。

北里　（富子の手をとり）富子！　當てゝみろ。（梅本の方をむいて）福澤諭吉が何をしに來たと思ふ。

二人、ぽかんとしてゐる。

北里　（興奮して）三田の福澤なら事を議するに不足はない。コレラの血淸もつくらう。腸チブス、肺炎、丹毒連鎖球菌赤痢……仕事はいくらでもあるぞ。身體がいくつあつても足りなくなつてくるぞ。

梅本　先生。先生。

富子　あなた。どうなすつたのです。

北里　なんだ、お前達にはわからんのか。福澤諭吉がかういつたのだ。紅葉館で長與專齊に逢つたよ。君のほしがつてゐる傳染病研究所は、差當つていくらあれば仕事が初められるか至急に返事をして貰ひたい、とね。

富子　まあ！

北里　善子！　善子はどうした。（襖を開けて入り、すぐねぼけ眼の六歳の女兒を抱き上げて出て來る）ほら〳〵。お父さんだ。お父さんだぞ！　善子。眼をさませ。

富子　あなた、そんなこと可哀想ですよ。お止しなさいませ。

北里　何だ。泣く奴があるか。お父さんぢやないか。お父さんだ。ほら〳〵。はつは……。

と、ふり廻す。

第二幕

北里の家の裏に當る芝公園の一角に出來た新らしい傳染病研究所の一部。

明治廿六年三月。午後遲く……。

二部屋よりなり一方は北里の部屋。他の一方は研究室になつてゐて、試驗管培養器、廿日鼠の箱など、どた〳〵置いてある。

研究室の机の上で梅本が熱心に顯微鏡を覗き、時々何か書き込んでゐる。

相良ふみ、本を澤山抱へて北里の部屋に入つてくる。机の上に置いてさて何處へ並べたものかと見廻してゐる。すぐ後から富子、これも本を抱へてゐる。

ふみ　あすこの本棚へ、勝手に並べてよろしいんでございませうか。

富子　さうですねえ。結局自分でしなくちゃ氣が濟まないのでせうからこのまゝにして

置いていいでせう。

ふみ　でも今日は福澤先生がおいでになるんでございませう。あんまりごた〳〵してゐては、いくら引越し怱々にしても悪いんぢやございませんかしら。

富子　さうでしたつけ。ぢやとにかく形だけでも並べて置きますか。

ふみ　（本を並べつゝ）私、かういふことをしてゐると、以前にもこれと同じことをいつか何處かでしてゐたことがあるやうな氣がして仕方がありませんわ。

富子　お父様の御書齋ぢやございませんの。

ふみ　太田にゐた間、こんなくらしを又して見たいと思ひつゞけてゐた所爲かも知れませんの。私の父は大事にしてゐた御本で煮物をさせますのよ。厭でしたわ。

富子　御本で？

ふみ　薪を買ふ事も出來なかつた所爲もありますけど。私三日も四日も煮物をしないで放つて置いたことがありますのよ。さうしたら父は自分で下りて來て、本の頁を破いては燃し破いては燃し、口の中で御念佛のやうなことをぶつ〳〵いつてゐるんです。今でもはつきりその時の様子を思ひ出しますわ。

富子　やつぱり。もう御仕事をなさる氣はおありにならないのですか。

ふみ　田舍へ行つて百姓をしてみたいなどゝ、時々いつて居ります。故郷は栃木で住みよい所らしいし、それもいいと思つてをりますの。

富子　惜しうございますわね。何とかお氣持ちを變へることは出來ないのでせうか。

ふみ　頑固ですから……それに、もう年をとつてゐますし今から勉強し直してもどれほどのことが出來ますか。

隣の部屋から梅本が立つて來て覗く。

梅本　お手傳ひしませうか。

富子　いゝんですよ。あなたもう御仕事？

梅本　さういふわけでもないんですが、しかけたものが殘つてゐるもんですから。善子さんどうですか。

富子　なんだかぐず〳〵いつてゐますわ。風邪でもひくんぢやないかしら。

梅本　春と云つてもまだ寒いですからね。熱は？

富子　朝は七度三分位だつたけれど……。

梅本　大したこともなささうだな。子供の平熱つて割合に高いんでせう。

富子　それにあんな時分はわけの判らない熱がちよい〳〵出るさうですから。

梅本　醫者を呼びましたか。

富子　いゝえ。北里が歸つてから相談しようかと思つて……。

梅本　それもいゝが先生にしても私にしても、臨床は專門ぢやないんだから一遍見せといた方がいいんぢやないんですか。

富子　さうですね。さうしませうか。

ふみ　その方がよろしうございますわ。私行つてお醫者樣迎へて來ます。

富子　ぢや、御苦勞でもちよつとお願ひしませうか。酒屋さんの角を曲つた所に……。

ふみ　井關さんでせう。知つてをります。ぢやちよつと……。（出てゆく）

富子　（見送つて）あの方、みなりが變ると三つも四つも若くおなりのやうね。

梅本　そりやさうでせう。牛屋の女中とぢや氣持ちだつて較べものにならないでせうからね。

富子　今度は、あなたのお嫁さんですわね。

梅本　いやあ。僕の方はまだ〳〵です。

富子　さう、いつ迄も獨りぢやいらつしやれないわ。暮らしの方だつて、一人でゐても二人でゐてもそんなに變らないでせう。今なら北里からだつて少しはお手傳ひ出來るでせうし。

梅本　ところが、又別な障害が出てきましてね。當分沙汰止みですよ。

富子　どうして。

梅本　貞子の父が。私が傳染病研究所にゐると聞いて、さういふ危い仕事をしてゐるものに大事な娘をやれんといひ出したのです。

富子　で御本人の貞子さんはどういつてらつしやるのかしら。

梅本　本人は何とも思つてゐないらしいですがね。今日こんな歌を書いて送つて來ました。

富子　（みる）うつゝなく消えてやはてん筆折りて、歌反古やきて消えてやはてん。隨分はげしい歌ね。でも美しいわ。人の姿までみえるやう。かういふ方ならお家でどんなに反對なすつたつてきつとあなたの所へいらつしやるわね。

梅本　まあ、何か私が大きな仕事でもすれば、家でも少しは氣持を變へてくれるかもしれませんが。

富子　さうね。立派な仕事をしませうよ。私達みんなで力を合せれば世間であつといふやうな仕事がきつと出來るとお思ひにならない？

梅本　そりやさうしたいと思ひますね。

富子　出來ましてよ。北里がよくいふぢやありませんか、これからの本當の醫者の仕事は、臨床と細菌學を元にしてもつと根本の豫防衛生の方へ進むだらう。醫者の必要がなくなる時代がくればそれが本當に醫學の勝利だつて。

梅本　それだけの大事業を、この假建築でやつてゆくのですかねえ。

富子　初めは何だつてさういふものですわ。でも私は北里のいふこと、ほんとだと思ひます。考へて見るだけでもいい氣持ちぢやありませんか。

梅本　いい氣持ちには違ひありませんがね、私にはそれをやる爲の困難さの方がはつきりみえて困るんです。

富子　（梅本の肩を押へて）元氣がありませんのね。貞子さんの手紙の所爲よ。

梅本　（微笑して）今日は少しどうかしてゐるんです。

富子　さあ。元氣を出しませう。羊小屋のお掃除を手傳つて頂戴。（と出てゆく）

梅本　ええ。心配をおかけして、すみません。後から直ぐ。

と、研究室へ戻り、片附け始める。北里外出から戻つて研究室の入口から入る。

梅本　お歸んなさい。

北里　（むつゝり）ん。（自分の部屋の方へ行く）

梅本　（北里の方へ行く）福澤先生と御一緒かと思ひましたが。

北里　ああ。迎へに行くつもりでゐたが、止して歸つた。

梅本　それぢや今日はお出でにならないのですか。

北里　さうなるだらう。

梅本　殘念ですね。血清をとる所をお目にかけられると思つてゐたのですが。

北里　うん。

と、云ひつゝ椅子にどすんと腰を下ろし。

北里　梅本。覺悟をしてゐなくちやいかんぞ。戰爭だ。

梅本　清國といよ〳〵やるんですか。

北里　う？　いやさうぢやない。傳染病研究所が世間を相手に戰爭だ。

梅本　と、いふと。

北里　これを見ろ。（ポッケットから書き物を出す）

梅本　（讀む）勸告狀？

北里　さうだ。傳染病を扱ふ研究所をこんな所へ建てられては區民が迷惑千萬だから卽刻立退けと云ふのだ。

梅本　だつて、ちやんと當局の認可を受けて建築したものぢやありませんか。

北里　傳染病毒は消毒を以て完全に防ぐに足らぬものである。況んや研究所に將來病院を附屬せしめる計畫あるに至つては芝區の繁榮を害じ、區民の到底忍びざる所であるといふのだ。

梅本　何と云ふ無智な。自分達の生活が日々その危險の中で何の慮りもなくすごされてゐることに氣がつかんのですか。

北里　それも、民衆の彌次馬的な反對ならいい。しかし此處に連つてゐる名をみるがい

い。

梅本　（讀む）

北里　衆議院議員末松謙澄、評論家末廣鐵腸、前帝國大學總長渡邊洪基、子爵林友幸。

梅本　俺は啞然としてしまつたよ。

北里　この連名を何處へ出したのですか。

梅本　東京府知事だ。衞生會の方へは區民暴動の虞れある故北里らは身邊を注意せよといふ脅迫狀が來てゐるさうだ。

北里　何處かへ引越しでもすればいいんですか。

梅本　引越すればそこで又追ひ出し運動が初まるさ。引越しなど絕對に出來ん。

北里　……それはさうですね。

梅本　それにさういふ愚かな世間の眼を開くこともわれ〳〵の仕事だ。北里は斷じて退かん。俺は栃原助之進門下で劒道では四天王といはれた男だ。俺を狙ふものがあつたら一人〳〵取り押へて說敎をしてやる。（ノック。怒鳴るやうに）誰だ！

ふみ入つて來る。

ふみ　長谷川先生からお話があつた筈だといつて、この方がおみえになりました。

北里　（名刺を見て）此處へ連れて來給へ。

ふみ　はい。

北里　（梅本に）この三月に帝大を出た男で、こゝで働きたいといふのだ。（名刺を渡す）

梅本　と、やはり緒方正規先生のお弟子ですね。

北里　さうだらうな。

梅本　お入れになるのですか。

北里　逢つてみなくちやわからん。どうせ人は要るのだ。（ノック）お入り。

梅本　ぢや後で……。（と、會釋して隣室に入る）

喜多一郎、ふみに案内されて入る。

ふみ　どうぞ。（と、喜多を入れて、扉を閉めて去る）

喜多　喜多一郎です。

北里　ああ。長谷川君から話は聞いとる。まあ掛け給へ。

喜多　は。（掛ける）

北里　煙草はどうだ。（と出してやる）

喜多　結構です。

北里　嫌ひかね（自分は火をつける）

喜多　嫌ひぢやありませんが、今は欲しくないのです。

北里　酒はどうだ。

喜多　多少呑みます。

北里　多少と云ふのは何のくらゐだ。

喜多　相手によつて決まるので、はつきり自分ぢや量つてみたことはありません。

北里　それぢや一遍俺と一緒に呑んでみ給へ。古くからゐるので梅本といふ青年がゐるが、こいつは歌ばかり作つてゐて一向に話せん男だ。

喜多　私は歌の方は一向わかりません。喧嘩なら少し自信がありますが。

北里　歌と喧嘩とは何の關係も無いぢやないか。

喜多　特殊技能といふ點で多少關係があるかと思つたのです。

北里　（初めてにやりと笑ふ）相當自信があるな。世間では北里は緒方教授の弟子のくせ

に、師匠の研究を否定した。師弟の道を知らん男だといつとる。知つとるかね君は。

喜多　知つてゐます。

北里　知つてゐて緒方先生の生徒がどうして俺の所へくる氣になつた。

喜多　學問上のことは人情ではどうにも仕方がないことだと思ひます。私が研究所へ入つても、仕事の上では北里先生を抹殺するやうなことがないとは限りません。

北里　おい〳〵初對面怨々あまり風呂敷を擴げるな。（と、いひつゝも上機嫌）

喜多　先生に質問しても構ひませんか。

北里　今度はあべこべに俺を試驗するのか。よしやつてみろ。

喜多　先生はドクトルコッホと一緒にツベルクリンの研究をなすつたのですね。

北里　うん、やつた。

喜多　あのツベルクリンは肺病の藥としては全然効かぬばかりか、あれを注射した爲めに病氣が急に悪くなつたなどといふ非難がありますが、先生はどうお考へになりますか。

北里　ふむ。そいつは大變大事な問題だ。全體コッホ先生のツベルクリンといふものはひとつの豫言だ。決定的なことはこれによつて結核に對する戰ひの新らしい一歩が踏み出されたといふことだよ。コッホ先生の見解によればツベルクリンは結核に對する萬能藥ではなくて、多くの豫防劑の一つとなる筈のものだつた。失敗の責を負ふべきものは、非難される發見者よりも、之を無雜作に使用した醫者にある場合が多いのだ。必要な經驗も愼重な準備もなく提出された問題を解答だと早合點した人達にな。

喜多　すると、先生はいつかその問題の解答に手をつけになるつもりですか。

北里　ああ。それはやらなくちやならん。やるつもりでゐるよ。（と立上り）梅本君。梅本君。！

梅本入つて來る。

北里　紹介する。喜多一郎君だ。此方は梅本清作。

二人頭を下げる。

北里　緒方教授に緣も由緣もない連中が俺のことを師弟の道を知らん人間だと非難して

ゐるかと思ふと、先生の直門の君が僕の研究所へやつてくる。君が此處へ來たいと云つたら緒方先生は何と仰言つたね。

喜多　はあ。卒業生が二十人ゐるのだから一人くらゐそんなのがゐてもいいだらうと仰言いました。その外には別に。

北里　さうか。俺は先生が衞生局にをられた時代に初めて衞生病理の手ほどきを受けた人間だ。俺は今でもその後を受けついでやつてゐるつもりでゐるんだ。いつかお互に笑つて話す機會もあると、たのしみに待つてゐるんだよ。

長谷川　ノックと共に。入るよ。

北里　おお。

長谷川　(入つて)やあ來てゐたのか。

喜多　お寄りしようかと思つたんですが、お忙しいんだらうと思つて。

長谷川　ああ、お目見えはもう濟んだのか。

北里　今すんだばかりだ。君が廻して寄越すだけあつて豪勢骨ッぽい士だな。

長谷川　(笑つて)親爺が肥後の田舍つぺいだから成る可く調子の合ふ奴がよからうと思つてさ。これでも仲々氣を利かせた所だ。

梅本　どうも、傳染病研究所は中の人間迄世間からバチルス扱ひを受けさうですなあ。

北里　さう悲しさうな顏をしないで喜多君に一遍所内を見せてやつたらどうだ。

梅本　ええ。ちや君。

喜多　ちや……。

長谷川　二人會釋して出て行く。

北里　仕事は進んでゐるのかね。

長谷川　ああ。着々と進んでゐる。一昨日、やつと生き殘つた一號緬羊から最初の血清をとつて見た。

北里　すると、そいつはもう直ぐ實用に供することが出來るのか。

長谷川　いや。さうは行かない。何度も動物實驗をした上でなくちや。つまり今度は別の動物をヂフテリアにかゝらせるのさ。それに血精をさしてみて反應をみるのだ。

北里　血精の濃度が足りなければ免疫とは逆の作用をする危險があるからね。

長谷川　それぢや、醫者が使へるのはまだ〳〵先の話だな。

北　里　まあ來年の話だらう。

長谷川　それ迄この研究所が續くかい。

北　里　續くかとは何だ。

長谷川　立退き運動が起つてゐるさうぢやないか。

北　里　ああ、それを聞いてきたのか。（默つて立上り、その邊を歩き廻る）……續くとも、續かせなくちやならんぢやないか。

長谷川　せめてその血精の效果でも早く世間に知れてくれれば、かういふ莫迦げた運動も立消えになると思ふんだが……。

北　里　醫學の仕事は裁判ぢやない。證據をみなければ納得がゆかんといふやうなことは法廷でいつて貰はうぢやないか。

長谷川　俺はさう思はんね。醫學の問題こそ常に實證の上に立つてゐる。實證が最初で最終だ。我々は、培養臺と顯微鏡と臨床醫の報告書とを手にした時でなければ斷乎とした物の言ひ方は出來ない筈だよ。

北　里　その前に長い模索と豫感と確信の時期があるのだ。それが根柢の仕事だ。何事でも結果を先に見せるといふことは出來ん。科學もまた必要と信仰にその源を發してゐるのだ。

長谷川　しかしその模索と豫感との長い過程をすべて民衆の眼に曝すまで時が熟してゐるかどうかといふことを考へてみてもいいのではないのか。凡そ物には汐時といふものがある。それを見ないで事を急いでは成るべき事も成らずに終るばかりか、必要缺くべからざる事の價値さへ誤られることもある。

北　里　では君は傳染病研究が時期尙早だといふのかね。

長谷川　研究は尙早ではないさ。たゞ研究所と云ふ名前が問題なのだ。

北　里　君。それは腸チブスになつても屆出ると役所がうるさいから大腸カタルとしておかうといふ醫者の辯護をしてゐるやうなものだ。われ〳〵は先づさういふ考へからブチ壞してゆかねばならんのだ。俺は福澤先生に話して結核治療所もやるつもりでゐるのだ。

長谷川　ぢやあの、議論の多いツベルクリンを使ふのか。

北里　（昂然と）さうだ。

長谷川　そんなことをしたら、君は民衆ばかりぢやない、醫者仲間からさへ抹殺されるぞ。

北里　抹殺が何だ。俺は傳染病を日本から驅逐するのだ。その爲めに必要な機關は必ずこれを造らなければならん。絶對にだ！　ツベルクリンを使ふとか使はんとかは抑々末の末だ。結核は防止出來る。しなくちやならん。それで澤山だ。（間）

梅本入つてくる。後から喜多。

梅本　先生。來ました。

北里　何だ。

梅本　芝區民の代表だといふ連中が。

長谷川、北里顔を見合せる。

長谷川　逢ひたいと云ふのか。

梅本　さうらしいです。

長谷川　何人も居るのかね。

喜多　主だつたのは五人ですが、彌次馬みたいなのが後からぞろ〳〵ついて來てゐます。

北里　逢はう。（出てゆく）

間。

梅本　大丈夫かな。

長谷川　まさかいきなり殴り合ひもすまい。

喜多　僕が行つてみませうか。

長谷川　君が行つちや納まる話もブチ壞しさうだな。

富子、せか〳〵と入つて來る。

富子　あ。御免なさい。いらつしやいまし。

長谷川　やあ。お邪魔してゐますよ。

（梅本に）あの、北里はまだ……？

梅本　今ちよつと客が來て應接間の方へ行かれましたが……。

富子　あ。さう。（と、そわ〳〵してゐる）

梅本　どうかしたのですか。

富子　え？　いいえ。別に……。ぢや又後で……。（出て行く）

長谷川　どうしたんだ。いやにそわ〳〵してゐるぢやないか。

梅本　變だな。

喜多　奥さんですか。

梅本　あ。君を紹介するのを忘れてゐましたね。

喜多　いゝですよ。何れ厭でもわかるんです。

北里入つてくる。

梅本　どうでした。

北里　お話にならんよ。

長谷川　やはり立退けといふのかね。

北里　俺は内務省衛生局の技師で、政府の認可によつてこの研究所を主宰するのだ。研究所は本館の外に病室、解剖室、動物舎、消毒所、浴室、賄所、八棟五百坪、豫定通り進行しますといつてやつた。

長谷川　いよ〳〵正面衝突か。

北里　かうなればもう仕方がないよ。

長谷川　うむ。

北里　まあ、君はしばらく默つてみてゐてくれ。

長谷川　いや。意見は意見として君が困るのを默つてゐるわけにはゆくまい。出來る丈けの手段はとつてみようぢやないか。いけなければいよ〳〵殴り合ひだ。

北里　（靜かに）有難う。（と頭を下げる）

富子入つて來る。

富子　（梅本に）やつぱりあなたにちよつと……（と云つて北里に氣がつき）あら、もうお客様お歸りになつたのですか。

北里　うん。

富子　あなた。どうしませう。善子がヂフテリヤらしいんです。

北里　え？

富子　あなたも風邪でもひくんだらうくらゐに仰言つてたし、今迄だつて時々わけのわ

からない熱の出たこともあるからそんなこと夢にも思つてなかつたのですけれど……。

北里　それで、熱は高いのか。

富子　今八度五分でした。

北里　咳は？

富子　今朝初めて氣がついたのですがだん〳〵ひどくなるやうです。扁桃腺に膜が出來かゝつてゐるから恐らくさうだらうと先生が……。

長谷川　醫者に見せたのですか。

富子　角の井關さんにお願ひしましたの。

長谷川　まづい。そいつはまづかつたなあ。

北里　ふむ。（座つてしまふ）

長谷川　それでなくても傳染病菌を扱ふから危險だと立退き運動が起つてゐるんですよ。あなたは御存知ないからだけれど、その醫者が他所へ行つて何をいひふらすかわかつたもんぢやありませんからねえ。

富子　まあ。

ガチヤンとガラスの壞れる音。皆窓の方をむくと同時に。

外の聲一　北里柴三郎、出て來い！

同　二　さもないとこの建物に火をかけて燒いてしまふぞ！

北里立つてつか〳〵出て行かうとする。長谷川その手を抑へて。

長谷川　君が出ちやいかん。俺に委せろ。

北里　だが。

長谷川　いいんだよ。喜多君一緒に來てくれ。

喜多　は。（二人出てゆく）

間。

富子　すみません。どめんなさい。あなたがあんなにやかましく仰言つたのに、羊小屋に出入りしたからこんなことになつてしまつたのです。

北里　季節の變り目には市井の町家でだつてヂフテリヤはいくらでも出るんだ。お前が病菌を媒介したかどうか、そんなことがわかるものか。

富子　いいえ。さうに違ひありませんわ。でも私はたゞあなたのお仕事をお手傳ひしたかつたのです。少しでもお役に立ちたかつたのです。消毒だつて忘れずにちやんとしてゐたつもりですわ。それだのにこんなことになつてしまつて。おまけに他所のお醫者にみせたりなんかして……。

梅本　いや、その事については私が……。

北里　そんなことはどうだつていい。

富子　よかありませんわ。ちつともよかないぢやありませんか。長谷川先生の仰言る通りよ。あのお醫者は近所を廻つて善子がヂフテリヤだつていひ觸らすでせう。あなたの御仕事をやめさせようと思つてゐる人には勿怪の幸ですわ。それを材料にしてここの立退き運動を一層大きくするに違ひありませんわ。

北里　それがどうしたといふんだ。そんなことは俺はちつとも心配してやしない。俺はそんなこととはまるで別なことを考へてゐるのだ。

北里　二人、北里の顏をみてゐる。

俺は、一昨日とつた血清を、善子に試してみようかと……思つてゐるんだ。

梅本　しかし先生、動物試驗もしないでいきなりお嬢さんに使つてみるなんて……。

北里　だから迷つてゐるんだ。だがヂフテリヤには今の所特殊療法といふものは一つもない。對症的に吸入とか、塗り藥でごまかしてゐる間に、惡化して氣管切開をやるくらゐが落ちだ。とすれば……やつて見る値打もあらうといふものぢやないか……。（間）

富子急に泣きくづれる。

北里　（怒鳴る）泣く奴があるか！

富子　はい！（飛び上るやうに泣き止む）

北里　（やさしく）富子、やらせてくれ。なあ。善子も救はれる。俺も助かるのだ。善子が癒ればヂフテリヤ血清の效果が知れる。あの醫者がそいつをいひ觸らしてくれるぢやないか。さうすればこの研究所も助かる。いや、いやそんなことはどうでもいい。俺は俺の造つた血清の效果がみたいのだ。な。やらせてくれ。

富子　（又泣き乍ら）はい。

北里　梅本。一號血清を持つて來い。相良君、相良君！

相良ふみ、顔を出す。

北里　急いで火を造つてくれ。それから注射筒を煮てくれ。

ふみ　はい。（引込む）

北里　さあ。富子、善子を連れておいで。そうつと抱いてな。なんでもないんだよ。すぐ濟むよ。

富子　……。

北里　早くしないか！

富子　はい。（走つて出てゆく）

北里、思ひ切つた一念に今は不安の蔭もなく机の前に兩手を突張りどつかと座る。

夕闇の色が漸く濃い。

第三幕

第二幕の研究室を外からみた形になる庭。

明治廿七年五月の明るい眞晝。

白いベンチ一つ。芝生。研究室への扉。

幕の前から看護婦達の歌聲。

ベンチの上に富子、善子繪本をみてゐる。芝生には看護婦達が思ひ思ひに座つてゐる。朱塗りの針箱を置いて縫物をしてゐる者もゐる。

明るい日ざし。

富子　（繪本を讀んで）桃太郎さん、桃太郎さん、お腰のものは何ですか……。知つてる

でせう善子、何だか。

善子　きびだんご。

富子　さう。日本一のきびだんご。……善子も來年は學校なんだから少し、字い字、覺えなくちやいけませんね。

野々宮　善子さんいらつしやい。私、字い字教へて差上げますわ。

富子　ほら。野々宮さんが讀んで上げますつて。

善子、本を持つて野々宮の方へ行く。

野々宮　まあ、綺麗な御本ですこと。

佐々木　(のぞいて)この桃太郎さん、善子ちやんに似てますわ。ほんとに桃みたいなほつぺた。

富子　小森さんの謎ひ物、なあに。

小森　これ、赤ちやんのちやん〳〵こでございます。

林　あなた今から赤ちやんのちやん〳〵こつくつてお置きになるの。

石川　隨分御用意のいいことね。

小森　嘘よ。自分の赤ちやんぢやないわよ。私奥さまの赤ちやんに差上げようと思つて。

富子　あら、それは御親切に。でも、それにしても少うしお手廻しがよろしいやうね。

小森　ええ。でも私、これを仕上げたらお頭巾を造らうと思つてゐますの。お頭巾とちやん〳〵こと、それから足袋が出來る時分には丁度いい頃になりますわ。

野々宮　まあ。隨分遠大な御計畫ですことねえ。

林　でも、赤ちやんは男だか女だか、今からわからないぢやありませんか。

小森　ええ。でも私は男だと思ふの。

佐々木　あら、どうして。

小森　どうしてつてことないけど、さういふ氣がするんですの。奥様は？

富子　さあ。私にもわかりませんけれど。

野々宮　初めがお嬢さんだから、やつぱり坊つちやんの方がよろしうございますわねえ。

富子　さあ。(笑つてゐる)

下手から喜多と北里話しながら出てくる。

北里　破傷風に對して一番敏感な動物は馬だが、地方の百姓が相變らず相當この病氣にかゝつて倒れてゐる所をみれば人間の罹病率も相當高いといはなければならんのだ。これは泥の中にある菌が傷口から入るんだから、ここで若し戰爭が始まると、さういふ戰傷の傷口と不充分な衛生狀態から必ずこの病氣が……。（女達の會釋に氣がつき）ああ、靈休みかね。（富子に）どうだね、氣分は。

富子　ええ。ずつとよろしいやうです。

北里　そりや結構だ。（女達が向ふへ行からとするのをみて）おい〳〵。俺が來たからと云つてさう逃げ出さなくてもいい。

女達くす〳〵笑つて走つてゆく。

野々宮　善子ちやん、いらつしやい。

善子走つてゆく。

北里　ああ、いい天氣だ。少し日向ぼつこでもするか。まあ座れ。

喜多　ええ。（座る）しかし、どうでせう戰爭になるでせうか。

北里　獨立黨の金玉均を上海に誘ひ出して暗殺したのはやつぱり同じ韓國人でせう。

喜多　だがその屍體を清國軍艦で韓國に送つてゐるぢやないか。軍艦だよ君。しかも屍體をさらしものにする爲にだ。これは明かに日本に對する袁世凱の挑戰行爲だよ。

北里　金玉均といふ人物がわが國の保護下にあつただけにさうとれますね。

喜多　金玉均暗殺事件は小さなことに思へるが仲々さうぢやない。十七年の天津條約で日清兩國の完全撤兵を約束しながら袁世凱はその後も依然として京城に現はれて韓國の軍隊を己の軍隊のやうに扱つてゐる。これぢやまるで韓國は清國の屬國だよ。天津條約は實質的に蹂躙されてゐる。そこへ今度の事件だ。今清國に宣戰しなければ日本の獨立國としての面目が立たんぢやないか。

北里　どうも、先生も段々福澤先生に似てきますね。仰言ることが。

喜多　なに、この件に關しては、俺の方が本家だ。俺はとにかく軍人か政治家になるつもりでやつて來た人間なんだからな。

喜多　時事新報でも隨分今度のことは重大事にみて書きたててゐますね。

北里　そりやさうだらう。福澤先生は獨立黨の志士達には隨分盡してをられる。對支談判が氣に入らねば自分獨りでも戰爭をする意氣込みだらうさ。

喜多　ぢや、今のことは梅本君ともよく相談しまして。

北里　ああ。さうして貰はう。

喜多　養生園の方へは今日はお出でになりますか。

北里　う……いや。今日はゆかない。

喜多　ぢや、後でまた……。（室へ入つてゆく）

間。

女達の歌聲。

北里　あの歌は何の歌だい。

富子　燕の歌ですわ。

北里　この研究所であんな女の子達の歌を聞くなんて、ちよつと妙な氣がする。

富子　去年の春頃のことを思ふとまるで夢のやうな氣がしますわ。

北里　去年の春か。俺は辭表を出して田舍へ歸つちまはうと思つてゐたんだ。

富子　初のうち、どんなことがあつても後へは退かないなんて仰言つたくせに。

北里　東京府と私立衛生會の態度に確信がなさすぎるのでぢれつたくなつちまつたのだよ。

富子　福澤先生があなたの辭表を新聞にお載せになつたのは四月でしたかしら……。

北里　長谷川の奴が毎晩々々演說會をして歩いて喉から血が出るなんて滾してたつけ。

富子　あの方もほんとにいい方で……。

北里　しかもあの男は、俺のやり方にはちつとも贊成してゐなかつたのだからなあ。

富子　有難いとお思ひにならなくちゃ。

北里　政府で認め、帝國議會で補助金までくれることになつてゐる事業が地元の反對であれ丈けの騒ぎになつたのもわからないが、それがひとつ變ると元々治療所でない研究所へ毎日患者がつめかけて來る。と云ふのもわからない。俺は今でも何だか、だまされてゐるやうな氣もするんだ。

富子　やつぱりヂフテリヤ血清のおかげかしら。

北里　さうすると善子も仲々あれで手柄をしてゐることになるな。

富子　私ぢやございませんの。

北里　あの時の顔色つたらなかつたぞ。

富子　ふふふ……。

間。

富子　ねえ。

北里　ねえ。

富子　あの時、田舍へ歸つてゐたら、今頃どうしてゐるでせう。

北里　北里村は山と山との間の、谷川に沿つた貧しい村だが目の前には阿蘇の山がみえる。火山の脈があるので村のあちこちから溫泉が湧いて出る。暮してゆくのには別に不足はない所さ。

富子　なんだか行つてみたいやうな所ですわね。お話伺つてると。

北里　天下泰平の田舍醫者になつてゐたかも知れない。

富子　でも、あなたはそれで滿足してはゐらつしやれませんわね。

北里　俺は別に立身や榮達は望んでゐないよ。

富子　だけどあなたの御仕事への野心が……。

北里　野心か……。

富子　野心ですわ。あなたときたら御自分の御仕事の成果を知るためになら、大事な子供の命でさへモルモットの代りにお使ひになるんだもの。

北里　なんだ。まだあれに拘つてゐるのか。

富子　拘つてゐるわけぢやないけれど。私時々あなたつて方、怖くなることがありますの。

北里　（富子の傍へ行つて座り）かうしてゐてもかい。

富子　今はさうぢやないわ。でも時々あるんです。あなたが、私からどん〳〵遠くなつてみえなくなつてしまふやうな時が。さういふ時、私はどう焦つても追つけませんの。私の愛情や私の不安なんか、あなたにとつて藁すべほどの關りもなくなつてしまふんですもの。

北里　俺が大學を出たのは三十二の年で、世間並から考へると隨分晩學だ。それも親の

仕送りでのんびり勉強してゐられる身分ぢやなかつた。書生に住み込んで走り使ひ、飜譯、雜用、……未だにその苦學生根性の焦りがとれないのかな。

富子　そんなものぢやありませんわ。年のひらきの所爲かとも思つてみますの。さうでもないのよ。あなたの中に……さう云ふものがあるんですね。始終何處か吐け口をみつけて噴き出さうとしてゐる、御自分ではどうにもならない力みたいなものが。

北里　俺も今年は四十三だよ。そろ〳〵腰を据ゑなくちや。

富子　研究所ももう大丈夫だし、療養所の方も福澤先生が建てて下すつたし……。

北里　內務省では後藤局長が研究所を官立にする案を出されたさうだ。

富子　さうすれば官立傳染病研究所の所長さんですね。

北里　細菌學は衞生行政と結びつかなくちや實質的には無意味だといふのは俺の持論だ。

富子　いよ〳〵あなたの、やりたいことがおやれになるわけぢやないの。

北里　コッホ先生も、パスツールも、リスターもそこ迄組織的な仕事はまだやつてゐな

い。

富子　子供も今年中に二人になりますわ。

北里　まつたく、いつ迄書生みたいにわく〳〵しちやゐられない。

富子　ほんとに、落ちついて下さらなくちや。

二人顏を見合せて笑ふ。

すつかり他所行きの仕度をした相良ふみが上手から出て來る。

ふみ　これから參ります。いろ〳〵お世話になりまして。

富子　ああ、もうお行きになるの。

ふみ　はあ、奥さまもどうぞお大事に。

富子　あなたもね。

北里　荷物もみんな運んだのかね。

ふみ　梅本さんがすつかりして下さいました。

北里　惜しいものだ。どうして栃木なんかへ引込んでしまはれるのかなあ。

ふみ　一旦思ひついたことは誰がどういつてもきゝません。それが父の一生を引きづり

廻すやうなことになるのでせう。仕方がございませんわ。

富子　あなたも又、御苦勞ね。

ふみ　でも先生のお氣持ちだけは忘れられないやうです。お目にはかゝらないがくれぐれもよろしくと申して居ります。

北里　何も出來なかつた。何か出來るとすればこれからだ。ほんとは研究所へ來て貰ひたかつたのだよ。大變殘念がつてゐたと傳へてくれたまへ。

富子　あなたとお別れするの辛いわ。

ふみ　私も、せめて今年一杯お傍にゐたかつたと思ひます。來年になつてもお別れする時はやつぱり今年もう一年居たかつたと思ふかも知れませんけれど……。（微笑する）向ふへ參りましたらお便りいたゞきたうございます。

富子　ええ、あなたもね。

北里　何か、要るものがあつたら遠慮なくいつてきたまへ。

ふみ　有難うございます。では。

北里　ああ。

富子　お元氣でね。

ふみ去る。富子立つて見てゐる。手を振る。北里座りながら。

北里　運命といふものは、人の力で止め難いものかなあ。

富子　坂を轉がつて行く石をみてゐるやうな氣がしますわ。

北里　うむ。

二人、默つて考へ込んでゐる。

梅本出て來る。

梅本　先生、長谷川先生がおみえになりました。

北里　お、さうか。

立上つて入つてゆく。

梅本　ああ。いいお天氣ですねえ。

富子　ぢつとしてゐると眠くなりさうですよ。

梅本　もうすぐ夏ですものね。（といひつゝ座る）

富子　その後如何。貞子さんからお便りあつて？

梅本　はかなくも、明けにけるかな春の夜の、夢のみ君と打語りつゝ、この間こんな歌を書いてよこしました。

富子　相變らず歌を詠んでらつしやるのね。あなたのは？

梅本　いやあ。私のはお聞かせするやうなものぢやありません。

富子　お家では、今でもやつぱりかたいことを仰言るんですか。

梅本　相變らずです。

富子　何かこう、意地みたいなものぢやないのかしら。一度いけないと言つてしまつたから後へは退けないと云ふやうな。

梅本　結局私が臨床の醫者にならなかつたのがいけないのですよ。臨床ならいくらでも金がとれるのに、とでも思つてゐるんでせう。

富子　私、そのお父様つて人に一度逢つてみようかしら。

梅本　奥さんのお逢ひになつて話の出來るやうな人間ぢやありませんよ。

富子　でも、貞子さんて方がお氣の毒だわ。

梅本　本人はもう焦つてもゐないんですよ。生きてさへゐれば、なんていつてゐます。

その時自分があまりお婆さんになつてゐるので驚いたりしないでくれなんて……。

富子　ぢや、あなた方の間はお父様が御反對でもちつとも不安なんかないわけね……。さうして長い間離れてゐてお互に歌のやりとりをしてゐらつしやるのも、後になつてみれば、却つていいかたみになるといふものかしら。

梅本　……。尤も一生さうして終るかも知れませんがね。

富子　（立上り）あまりお考へにならない方がいゝわね。うまくゆくやうに祈つてゐます。（とちよつと肩を叩いて）どら、長谷川先生に御挨拶して來ませう。（入る）

梅本、殘つたまゝ紙卷煙草を出して一本喫ふ。喜多、室から出て來る。

喜多　なんだ。こんな所にゐたのですか。

梅本　何か用ですか。

喜多　ええ。さつきから方々探して廻つてたんですよ。やあシガーですね。すみません。一本下さい。

梅本　どうぞ。

喜多　（煙を吹いて）ああ、仲々うまいですね。

梅本　よろしかつたらどうぞ。

喜多　いや〳〵。結構です。……實はさつき親爺から話が出ましてね、當分の間チフテリヤ血清その他すべての藥劑製造をやめて破傷風の血清一本槍に集中する方針をたててみろといふんですが、どうですか。

梅本　それはどういふわけで。

喜多　明日にも日本清國の間に戰爭が初つたらば戰陣病としての破傷風の血清は急に需用が增えるといふんですよ。

梅本　ああ、成程。

喜多　搾清に使用する動物も緬羊ぢや採血量がしれてゐるから思ひ切つて馬を使つてみろといふのです。

梅本　しかし馬は非常に敏感だから毒素注入量をうんと薄めてゆかないと。

喜多　ええ。そこに技術的な問題が可成りありますがね。仲々あれで、うちの親爺も抜け目がありませんよ。

梅本　先生がさう仰言るなら、それは利害とは關係なく先生が一番必要と思はれるからですよ。

喜多　でもそれで利益が上ると云ふことは又明かな見透しでせう。細菌一點張りの世間知らずかと思ふと、どうして經濟の道も人並すぐれて明るい。研究所開設以來僅一年だが、血清で上げた利益は莫大なものでせう。それに足りないで今度は結核療養所だ。世間では何だ彼だと批評のあるツベルクリンでも先生の手で注射されると効くといふからまるでおまじないみたいなもんですよ。何時の間に覺えたのか診察だつてその邊の臨床醫裸足ですからな。

梅本　君、先生をさういふ風ないひ方で批評するのはあまり愉快ぢやないよ。

喜多　批評をする譯ぢやありませんが、とにかく不思議な人物ですよ。

梅本　君の目にはどう見えるかしらんがね。先生には先生の信念があつてやつて居られるんだ。養生園だつて普通の臨床醫が開業するやうなつもりで開かれたのぢや決してない。結核療養から豫防への大きな運動の爲の實際的足がかりに過ぎないのだ。先生の場合は何をするにも研究の仕事と現場の仕事がつながつてゐる。そこ

が君達大學系の學者共と違ふのだ。

喜多　どうも、あなたは親爺を信仰してゐるんだから……。

梅本　ああ。僕は先生を信仰してゐるよ。君は先生に師事してゐながら先生を批判してゐるのが正しい態度だと思ふかね。

喜多　さあ。正しいか正しくないかしらんが、僕は僕の目でしか物を見ませんからね。ぢやとに角血清のことはやりますね。

梅本　むろん。先生がさう仰言るならすぐその手配をする。（入ってゆく）

喜多、ちよつと呆れた感じで見送つてゐる。

長谷川、北里、富子出てくる。

長谷川　いや、俺も實はちよつと訊かれた時にはわからなくつてね。何とか誤魔化して家へ歸つて本を引張り出してみた譯さ。ビューボニック、プレーグぢやわからんものね。

喜多　いらつしやい。

長谷川　やあ。

北里　香港の領事館ぢや、どうしてそんな不完全な電報を打つたのかね。

長谷川　領事館だつてしらんのだらう。內務省の保健課へ廻してさへわからんものを外務省あたりでわかる筈はないさ。

北里　しかし、ペストが香港に流行してゐるとすると一ぺんや大變なことだな。

長谷川　俺はペストなんて病氣は十四世紀で消滅したものだとばかり思つてゐたよ。デカメロン以來、殆ど其の名をきかんものね。何か他の病氣の間違ひではないのかな。

北里　日々數百人が死ぬと云ふやうな猛烈な病氣は他にさうないよ。

喜多　ペストといふと、黑死病のことですか。

北里　さうだ。二ケ月前から香港で猖獗してゐるといふのだ。

喜多　それで、何か特殊の防疫法が出來てゐるのですか。

長谷川　いやあ。てんやわんやらしいよ。英吉利はお膝元だからやつてるらしいし、佛蘭西の學者あたりも來ては居るらしいが。

喜多　日本からは行かんのですか。

長谷川　それさ。調査員を出すとすれば列國注視の中だ。へまな奴を出しては恥をかきにゆくやうなものだらう。北里を措いて人があるかといふことになるわけだが、後藤局長が二の足を踏んでゐるのだ。

喜多　と、いふと。

長谷川　日清兩國の今日の關係だ。明日どうなるかわからない。香港といふ所はさうでなくても英領になつてから支那人の對外思想のよくない所だ。うか〳〵日本人が迷ひ込んだりすると、何をされるかわからんからな。

北里　しかし、香港に出たものなら何時日本へ渡つてくるかわからない。うか〳〵してはゐられないよ。

長谷川　うん。その心配はあるんだがね。省では今のところ調査員を派遣しない方針らしい。長與先生が福澤さんに話した所支那人も危險だがペストそのものに北里がからんと誰が保證してくれると仰言つたさうだ。

北里　何だ。俺の所へ來る迄にみんなが相談してしまつてゐるのか。

長谷川　といふわけさ。何しろ海の向ふの話だからな。しかしペストが香港まで來たとい

ふこと丈けは君が知つておいていいだらうと思つて敎へに來たのさ。ぢや。

富子　大變失禮いたしまして。

長谷川　や、御免なさい。お大事に。

北里　あ。そりや、どうも……。

長谷川去る。喜多ついて去る。

北里　（ベンチに座りながら）ペストか……。

富子　ペストつて、そんなに怖い病氣なんですの？

北里　さうらしいな。俺も本に書いたものを讀んだばかりで實物には當つたことはないが、皮膚出血したり紫の斑點が出たりして死んでしまふ、慘憺たるものらしいよ。

富子　まあ。

北里　この病氣が初めて現はれたのは一三四六年頃だ。南部ロシヤに起つて小アジア、エジプトからイタリー全部とフランスの大半を侵して、どん〳〵ヨーロッパの方へ蔓延して行つた。病氣が終熄したのは七年後の一三五三年だが、オランダ、ス

イス、イギリス、スコットランド、アイルランド、すべて此の病氣の爲に蹂躙されて死んだものは二千五百萬人といはれてるくらゐなんだ。

富子　それで、その病氣の原因はまだはつきりわかつてゐないのですか。

北里　わかつてゐない。こいつは仲々わからないのだ。一八八六年に印度でこれが流行したことがある。コッホ先生が行かれたが、それでもわからなかつた。たゞ、ペストの發生期に先だつて夥しい鼠が死ぬといふことがわかつたのだ。水夫や旅客の中に患者がゐないのにどうしてペストが外國の港に輸入されるかと云ふ問題が、これで解決された。いいかね。鼠がペストの媒介をするといふことがわかつたのだ。もうひと息といふところなのだがなあ。

富子　あなた。まさか。香港へ行つたりはなさらないでせうね。

北里　（半ば空虛に）う……ん……。

富子　局長さんもゆくのは危險だと仰言つてゐるし、內務省でも人をやらない方針だといふのですから自分で行きたいなど仰言らないで下さいましね。

北里　ああ。わかつてゐるよ。調査員を派遣するかしないかは當局の方針にあること

だ。俺などの口を出す所ぢやない。（それでも段々落ちつかず強ひて抑へるやうに）大體このペストといふ奴には鼠蹊腺などを侵される腺ペストと云ふ奴がある。皮膚を侵されて表面に膿を持つ腫れ物をつくるものがある。肺を侵されて肺炎を起す厄介なものがある。中世の黑死病といふのは此奴なのだ。こいつにかゝると一〇〇％助からぬものとされてゐる。しかしね、コレラがコレラ病菌によつて傳播されるやうに、すべてのペストも又或種の黴菌の作用によつて起るといふことはもう疑ひもないのだ。

富子　（不安さうに北里の後を目で追つてゐる）

北里　ペストに關係あるのは、エヂプト鼠クマ鼠、ドブ鼠クロドブ鼠の四種だ。傳染經路はわかつてゐる。豫防原則としては鼠の徹底的な驅除だ。しかし罹病者がゐる。病原菌をつかまへねばならん。ペスト菌はどの位の生活力を有するものか。如何なる消毒藥によつて何時間で死滅するものか。

富子　（殆んど絕望的に）あなた。私のこと、いえ、あなた御自身のことをお考へになつて。福澤先生だつていけないと仰言つてゐるぢやありませんか。あなたにもしも

のことがあつたら私はひとりで赤ちやんを生まなくちやならないのよ。そんな事出來ませんわ。

北里　赤ん坊か。うん。しかしペスト菌は摑へなくちやならん。つい目の先ぢやないか。香港。

富子　ああ……。（そこへ座つてしまふ）

北里　富子、待つてゐてくれ。俺は内務省へ行つて來なくちやならん、後藤局長に逢つてくるんだ。（と部屋の中へ飛び込んでゆく）喜多君。喜多君。梅本！

富子　（顔を蔽つて伏してしまふ）

外で號外賣りの聲。

號外賣りの聲　え、號外、號外！　今出た新聞號外！　清國、朝鮮に兵を出す！　愈々清國出兵！　號外、號外！

富子動かない。

第四幕

二幕に同じ。大正三年十月。

外には秋の雨が降つてゐて薄暗い。

所長室は無人。研究室の方に喜多、所員一、二、三。

思ひ〳〵に椅子により默然。

長い間。

所員一　（焦々と舌打して）ち、いやな雨だなあ。

所員二　（窓の方へ行く）まつたくよく降る。まるで梅雨みたいですね。

喜多　親爺も、折角伊豆へ行つても散歩にも出られまい。

所員一　何だつて又伊豆へなんか行つちまつたんだ。そんな呑氣な場合ぢやないよ。

喜多　まあ〳〵さういふな。呑氣でないから行く場合だつてあるさ。

所員一　しかしこの傳研が生きるか死ぬかつていふ時ぢやないか。

所員三　傳研はもう死んでゐるよ。

所員一　なに。

所員三　内務省衛生局の所管にあつたものが文部省に移され、しかも帝國大學の所屬下に置かれるつてことは明かに北里柴三郎の敗北を意味するものぢやないか。

所員一　おい。よくさういふことを平氣でいへるな。貴樣それでも傳研所員か。取り消せ。

喜多　止せ〳〵つまらん。われ〳〵は今傳研が生きるか死ぬかなんてことを議論してゐるんぢやない。親爺が此處から退陣した場合、われ〳〵のとるべき態度を考へてゐるのだ。

所員二　問。

喜多　親爺はやつぱり辭職するのでせうかね。

所員二　一度いひ出したことはやるだらう。これ迄の經緯から考へたつて大學の下に置か

れて摩擦なしにやつて行ける間柄でもないからね。

喜多　これ迄は親爺がまるで思ふ樣にやつて來たのだからな。

所員二　局長は後藤新平に次で長谷川泰。運が良すぎたのかもしれない。世間ぢや衞生局は内務省にあり。而して局長は愛宕下にゐる。なんて蔭口をいつてたさうぢやないか。

所員一　一體長谷川局長の腰が弱過ぎるんだ。何故斷乎として衞生局所管を主張しないのだ。

喜多　板挟みになつて一番辛いのは局長さ。政府もこの八月には獨逸に宣戰して山東半島やヤルート島に兵を出してゐる。行政機關の整理縮少が理由とあつては異論を挾むことは出來んだらう。

所員一　だが、日露戰爭直後の歴史的な行政財政の縮少時代でさへ西園寺内閣は傳研の使命と重要性を認めて一指も觸れなかつたぢやないか。

喜多　それを今いつたつて何になる。事實は既に政府の方針として公布されたのだ。短い間。

所員三　梅本さんはどうしたのだらう。

所員二　さつき呼びに行つたのですがね。何だか部屋で書き物をしてゐたやうです。

所員一　また。老いたる戀人に歌でも書いてゐるんだらうさ。

喜　多　(笑つて)梅本君の戀人もすつかり有名になつてしまつたな。

所員一　どうかしとるよ。どれだけいい女かしらんが大抵にしろつてんだ。自分の頭を見給へ。そろ〳〵薄くなつて來てるぢやないか。

所員三　さう君のやうにいつたつてこいつばかりは仕方がないだらう。

所員一　わからんね。わからんよ、僕には。

善　子　(二十七歳)長谷川(六十五歳)と一緒に入つて來る。

所員二　あら。此處にいらつしたのですか。

喜　多　あ、善子さん。

善　子　いらつしやい。

長谷川　しばらく。今表で長谷川先生にお逢ひしましてね。御一緒に參りましたの。

喜　多　ほう。局長も。

善　子　(廊下へ出て)先生こちらに皆さんゐらつしやいますわ。

長谷川　所員達、顏を見合せてゐる。

喜　多　(入つてくる)やあ。お揃ひだな。

長谷川　いらつしやいまし。合憎先生も奥さんも伊豆の方へお出かけになつて。

善　子　さうだつてな。今家で俊一君に聞いたよ。善子さん。すまんがこいつを……。

長谷川　と、外套をとる。所員二が受とらうとするのを。

善　子　よろしいんです。私。

長谷川　と、受けとつて所長室の方へ掛けにゆく。

長谷川　よく降るなあ。年をとるとこの今時分の雨はぢかに身體に應へてな。いかんよ。

長谷川　といひつゝ、これも所長室の方へゆく。

長谷川　所員達嗤き合ふ。

善　子　(見廻して)ああ、この建物もすつかり時代がついてしまつたなあ。おう。あすこなんか雨洩りがするとみえて……。

長谷川　私より五つ年下なんですよ、たしか。

長谷川　さうそ、この建物の出來た時だつけ。あんたがヂフテリヤにかかつてモルモット代りに使はれたことがあつたなあ。

善子　お母さまが、今でもよくひとつ話になさいますわ。

長谷川　ははは。よほど忘れにくい事とみえるな。

善子　何も彼も昔の話になりますわね。

長谷川　ああ。昔の話だ。この建物の中には、日本の細菌學の歴史が入つてゐるのだ。志賀潔の赤痢菌、秦佐八郎のサルバアルサン、宮島幹之助の寄生蟲の研究、アメリカに渡つた野口英世もこゝで助手をしてゐた。あれは日清戰爭の最中だつたかな

善子　あ、親爺が香港でペスト菌を發見して戻つたのは。旭日中綬章を賜つて歡迎會が開かれた。近衞篤麿公が委員長で、それはそれは盛大なもんだつた。

長谷川　お父様、今この仕事から離れたらどうなさるかしら……。

善子　仕事はいくらでもあるさ。（北里の椅子に座る）結核豫防協會副會頭、濟生會醫務主管、日本醫師會々長、普通の人間ならこれだけでも重荷過ぎる位だ。

善子　お父様は今年六十三ですわ。この研究所をお造りになつてもう二十一年になるんですもの、今たつた一人でそこから出てゆかれるなんて慘め過ぎる氣がしますわ。

長谷川　善子さん、私はあの男を引留めるために有效と思はれる方法は全部とつてみた。だが駄目だつたよ。お蔭で此方の血壓がすつかり昂進してしまつた。ははは。儂は喜多君と話があるんでちよつと外して下さらんか。

善子　はい。ではまた後ほど……。

長谷川　ん。後でお茶でもたてゝ貰はう。

善子　承知しました。喜多さん長谷川先生がちよつと……。（出てゆく）喜多入つてゆく。所員顔を見合せてゐる。しばらく話を聞いてゐるが、やがて皆出てゆく。

長谷川　ま、かけたまへ。

喜多　は。（掛ける）

長谷川　（ゆつくり煙草に火をつけて）ところで……どうだな心境は。

喜多　局長こそ、如何です。

長谷川　（苦笑）俺の方は、命令を傳へるだけの役目だ。文政統一と行政整理の必要上、從

來衞生局の所管にあつた傳研を大學の方に移す。それだけさ。

喜多　しかし、抑〻大學の方で持ちたがつてゐた傳研をうちの親爺に主宰させたのはあなたでせう。

長谷川　左樣。さういふ因果關係を追つてゆけば、自分の蒔いた種を自分で刈るといふことになるかな。しかし政治といふものは人情で動いてをらんのでな。

喜多　ところが政治に動かされる人間はやはり感情で生きてゐますからね。

長谷川　皮肉と云へば皮肉、滑稽と云へば滑稽だな。

喜多　私は寧ろ、お氣の毒といひたいですよ。

長谷川　北里がか。

喜多　局長がですよ。

長谷川　まあその同情は俺の話を聞いてからにして貰はう。

喜多　私に、何かお話があるのですか。

長谷川　うむ……。(間)君、北里の後をやらんか。

喜多　(ちよつとわからず)　え？

長谷川　傳研二代の所長さ。君なら元々緒方教授の生徒なんだし大學へ行つてもお互に工合がよからうと思つてな。

喜多　親爺の辭表は、もう出てゐるのですか。

長谷川　うむ。俺が預つてゐる。そいつを出す前に後を決めておきたいのだ。

喜多　どうも、大膽不敵ですな。そんな話にわざ〻この部屋へ乘り込んで來られるとは。

長谷川　北里と君と並べておいて切出すつもりでやつてきたのだ。まさか毆られもすまいて。

喜多　……折角ですが、その話は私にはお受け出來ません。

長谷川　何故だ。

喜多　親爺の身にもなつてやつて下さい。普通の人なら第一線から引退しても、もう不足はない年です。しかし親爺はまだ〻仕事慾に溢れてゐます。その人が無理矢理に腰を上げた後へ、いくらなんでもいい氣持ちで座れるもんでせうか。

長谷川　俺は、北里のことを考へるからいふのだ。親爺が殘してゆくものをお前が繼いでやればいくらかその志も殘らうといふものではないか。

喜　多　……。

長谷川　どうだな。

喜　多　お氣持ちはわかります。しかし……、

長谷川　厭か。

喜　多　……すみません。

長谷川　ふん。喜多一郎もとんだ人情家になつてしまつたな。

喜　多　どうも自分でも可笑しいんですよ、親爺にはあれで、何處かいい所があるんですなあ。

長谷川　手をやかせおるよ。あんな頑固爺の何處がいいのだ。

北里、富子入つて來る。

北　里　頑固爺とは一體誰のことだ。

長谷川　（ふり返り）戻つたのか。誰の事をいふものか。北里柴三郎と云ふ厄介な親爺のこ

とだ。

喜　多　お歸りなさい。

北　里　ああ。

富　子　（長谷川に）いらつしやいまし。

長谷川　やあ、お歸り。

富　子　あちらへいらつして下さればよろしいのに。寒うございませう。こんな所で。

長谷川　いやあ。どうでした伊豆は。

富　子　はあ。毎日雨で、どうにも……。

長谷川　何と思つて、今時分……。

富　子　なんですか急に、行つてみたくなりましてね。無理にねだつて連れて行つていただきました。

北　里　どうも、女房といふやつも古くなるとだん〳〵我儘になつて困るよ。

富　子　だつて、女は毎日々々家できまりきつた用事に追ひ廻されてゐるのですからねえ。たまには無理もきいていたゞかないと息つぎが出來ませんもの。ねえ。（と

長谷川に）

長谷川　大變御圓滿なことですな、しかし若い者の前だから少しお慎みなすつたら？

喜多　いや、私はもう馴れて居りますから。

皆、笑ふ。

喜多　おや。……。私は。

長谷川　ああ、御苦勞。（喜多去る）

北里　なんか、話があつたんぢやないのか。

長谷川　え。貴樣がをつては都合の惡い話だ。

北里　そいつは邪魔をして惡かつたな。

長谷川　なに。もう濟んだよ。喜多を貴樣の後釜に据ゑてやらうと思つたが失策つてしまつた。

北里　ふーん。斷られたのか。

長谷川　あの男は緒方教授の生徒で、俺が紹介して此處へ入れた人間だ。まさかと思つたがみごとに肘鐵を喰つた。

北里　そいつは氣の毒だなあ。

長谷川　この上貴樣に迄氣の毒がられては俺の浮ぶ瀬がないよ。この調子だと所員全部が連袂辭職かな。うう寒い。向ふへ行つて善子さんのお手前でもいたゞくか。

富子　さあどうぞ。

三人出て行かうとする。

梅本、研究室の方から入つてくる。

梅本　先生。

北里　なんだ。

梅本　ちよつとお話したいんですが。

北里　さうか。（長谷川に）一足先に行つとつてくれ。

長谷川　ん。（去る）

北里　（戻つてくる）何だね。

梅本　（思ひつめた樣子で）お願ひがあるんです。

北里　……。いつてみたまへ。

梅本　先生。辭表を、取り下げて下さい。

北里　……。

梅本　大學へ行つて下さい。私達みんなを連れて大學へ入つて下さい。

北里　（怒鳴るやうに）それは出來ん。

梅本　どうして出來ないのですか。學問の爲めに感情や行きがかりを捨てることがどうしてお出來にならないのですか。

北里　俺はゆきがかりや感情だけで傳研を去るのではない。

梅本　では面目です。傳研は生みの親である北里先生の意見を糺すこともなく、一應の了解を求めることもなく突然移管を發表されました。それは先生としてもわれわれ弟子としても耐へ難いことです。しかしその爲めに先生が二十年に餘る歳月と、精魂を傾けて築き上げられた研究所を捨てられるのは何としても私は贊成出來ないのです。

北里　だが、考へてみたまへ。君も知つてゐるとほり、この傳研は元々北里の私塾として出發した。こゝでやることは培養基の造り方から血精製造の女工の教育迄すべ

て俺の血が通つてゐるのだ。細菌學と行政とが結びついて直接國民保健の審議機關としてゆくといふ傳研のたてまへ自體が俺の醫學論だ。それが純粋の學問として大學の管下に置かれ、しかも各科に分けて配屬されるといふことになれば、いろいろな點で俺のやり方とはすつかり變つてくる。その研究所を俺が預かつてゐたつて效果の上るわけがないぢやないか。

梅本　だからと云つて先生が出てゆかれて何が殘るのです。傳研は先生が產まれた所です。その傳研の落ちつく所もみないで先生が出て行かれるといふことは學問に對して不親切です。亡くなられた福澤先生に對しても無責任です。私は厭です。先生がおやめになつても私はやめません。職員全部が罷めても私は殘つて大學へ行きます。

北里　……。君の傳研に對する愛情には敬意を表する。しかし俺は罷めるよ。俺には俺の醫學に對する考へ方があるし俺と云ふ人間は學校の教師には向かん人間なのだ。

出てゆく。梅本力が抜けたやうに頭を下げてゐる。喜多入る。

喜多　やりましたね、とう〳〵。

梅本　喜多君、僕の考へは違つてゐると思ふかね。

喜多　あなたは傳研の爲めには生涯を約束した婦人との間柄さへそのまゝにして今日迄やつて來られたのです。無理もないと思ひますよ。

梅本　僕は、かうするより他に生き方をしらんのだ。信念の爲には一歩も譲らないといふ先生のゆき方から御覽になれば未練に思はれるだらうが、僕には傳研を離れての生活はもう考へられない。

喜多　親爺の信念なんてものにさう拘はることはないですよ。すべてが自分の思ふ通りにならんくらゐなら自分の建てた研究所でも罷めちまふといふのは結局一種の我儘なんですからね。

梅本　……。君がほんとにさう思つてゐるなら、どうしてその考へを改めていたゞかうとしないのだ。

喜多　そんなことをしたつて仕様がないでせう。親爺だつて神様ではないんだから。しかし、親爺を信仰して何處までも一緒に行きさうにみえたあなたが親爺と別れて

も此處にゐるといふし、いつでも別れられると思つてゐた私があべこべに親爺と心中するといふのだから變るものですね。

梅本　僕は今だつて先生を信仰してゐるよ。君のやうに、先生のやり方を我儘だと思ひながら、それでゐて行動を共にしようとする氣持は僕にはわからない。

喜多　さうですかねえ。……私はこんな風に考へるんです。世の中には一尺に足りない籠の中でも結構天地の喜びを唄つてゐるカナリヤのやうな鳥もあれば、二間三間の檻の中に入れても、とまり木に止つたまゝですべての活動を停止してしまふ鷹のやうなものもある。人間もやつぱり生きる爲の天地といふものは夫々の器量によつて違ふんぢやないかと思ふんですがね。としてみると、親爺のわが儘といふものは、親爺の才能と手腕を生かす爲の絶對の條件だと考へることも出來るわけでせう。それをああだ斯うだと理窟をつけることはないと思ふんです。私は親爺といふ人間の大きさに感心するんです。しかし、いよ〳〵お別れといふことになると名殘り惜しいですな。

富子入つて來る。

富子　あの、すみませんがね、各部の部長さんで手の空いてる方に此處迄きて貰つて下さいませんか。ちよつとお話したい事があるので。

喜多　は。

梅本　私行つて來ます。（出てゆく）

富子　短い間。

喜多　よく降りますねえ。（と窓の方へゆく）

富子　先生は、研究所をお罷めになつたらどうなさるつもりなんでせうかね。

喜多　さあ。私にもよく判りませんがね。いつか結核豫防協會の仕事には自分の一生をかけるなんて申してゐましたから、そんなことでもやるつもりぢやないのでせうか。

富子　伊豆では、そんな話にはちつともお觸れにならないで？

喜多　ええ。毎日聽診器を持つては村の學校へ遊びに行くんです。廊下を走つてゐる子供を摑へては健康診斷をするものでね、子供達にすつかり友達扱ひをされてしまつて……。

喜多　私は、奥さんに何かお考へがあつて無理につれ出されたのだと思つてゐました。

富子　どうせ何といつても自分の思つたとほりにしかなさらない人ですから私はもう何にもいひませんよ。でもねえ……辭表が公けになると世間ぢや又、北里が大學に逆らつたといふでせうし。

喜多　その實、ことが大きくなつて、一番喜ぶのはその世間なんです。

富子　あなた方、まさか北里と一緒にお辭めになるお約束など、なすつてないでせうね。

喜多　……。

富子　私が北里を伊豆へ連れ出したのも、ほんとを言へばそんな話を北里の耳に入れたくないからなんですよ。さういふことになれば何處迄騒ぎが大きくなるかもしれません。長谷川先生だつて今の位置においでになることが出來なくなるにきまつてゐますからね。自分達ばかりの事ぢやないのですよ。よく考へて下さいね。

喜多　……。奥さんも、仲々大抵ぢやありませんなあ……。

所員一、入つてくる。後から他の所員、看護婦など。

所員一　しかしね奥さん、われ〳〵がこの研究所へ來たのは北里先生の學問と人物を尊敬し、信頼してその指導を受けたかつたからなのです。傳研といふものは北里先生を大黒柱とした一つの建て物のやうなものです。その中心の先生がお辭めになる以上、われ〳〵としては一緒に罷める他ないんですよ。

富　子　ぢやあ、やつぱりあなた方の間にはそんな約束が出來てるのですか。

所員二　約束といふわけではありませんが、期せずして考へが一つになつたのです。

富　子　いけませんよそれは。皆さんにはまだ〳〵これから長い將來もあり、立派なお仕事もしていたゞかなくちやならない人ばかりなのですからね。そんな、義理だてや、一時の昂奮から一生取り返しのつかないやうなことは決してなさらないで下さいまし。

看護婦小森　奥さま。私は二十歳の年に此處へ入れて頂いて、それからずつとお世話になつてきたのです。憶えてゐらつしやいますかどうか存じませんが俊一坊ちやんのお生れになつた時私は、自分でお頭巾とちやん〳〵こと、それから足袋を縫つてさし上げました。今更奥さまや先生の傍を離れてやつて行けと仰言つてもそりや

御無理と申すものでございます。（泣き聲になる）

富　子　（小森の肩を抑さへて、これも感動して）憶えてゐますよ。あなたは舌つたらずの、甘つたるい物のいひやうをしては皆さんにからかわれてばかりゐましたよ。もう隨分古いことになりますね。私だつてあなたと別れるのは辛いと思ひます。でも、いつか一度はこんな時が來るのです。それならあなた方だけでも殘つて一緒にやつて行つて下すつた方がお互にせめても慰めぢやないんでせうか。

所員一　（焦々して）一緒に行くとかゆかんとかそんな問題ぢやありません。傳研には傳研の精神があるのです。その精神の終る所に我々も亦終らうとするのです。

女工一、二、入口の所から駈け込んで來る。

女工一　先生方がおやめになるなら私達も御一緒に參ります。

老看護婦　どうしたのです。此處はあなた方の出てくる所ぢやありませんよ。

女工二　所長先生がおやめになるときいて、工場でみんなが相談したのです。私達も先生と一緒にやめさせていたゞきたいと思つてお願ひに參りました。

富　子　あなた方は？

老看護婦　血清製造所の女工さんでございます。奥様、こんな人達迄が先生の爲にならいつでも仕事を捨てる氣でゐるのでございます。

所員三　いや。女工達ばかりぢやありません。給仕も小使ひも、日雇ひの掃除婦達迄も親爺と行動を共にしようとしてゐるのです。

富子　（叫ぶ）いけません。いけません！　あなた方は北里をひゐきにして却つて北里が世間に顔むけの出來ないやうなことをしてしまふのです。

北里、ぬっと入つてくる。皆だまりこくつてしまふ。

長い間。

北里　（ゆっくり話し出す）　君達も知つてゐる通り、當傳染病研究所は去る十月十四日を以て移管を發表された。俺はこれを機會に一應引退するつもりでをる。俺の行動についてはいろ〳〵な考へ方があると思ふが、これは既定の事實として認めて貰ひたい。たゞその余のことについて一言したいのだが、俺は現役から引退すればいはば浪人の身分である。浪人には家來もいらぬ。一族も不要である。さういふものがゐては却つて荷厄介なだけだ。諸君が俺と行動を共にすることは斷然禁ず

る。君達は、自分が一人で世間へ出て行つても結構一人前の人間で通ると思つとるかもしれんが、それは間違ひである。君達は傳研と云ふ容れものの中に一緒にゐるからこそ社會の役に立つ人間なのだ。世間へ出ればたゞの金取り醫者の卵にすぎん。進退のことはよろしく愼重に考慮し、一路研學、以て邦家の爲め又學問の爲めに愈〻勵んで貰ひたい。このことは呉れ〴〵もたのんでおく……。

善子、後から相良ふみ、知安。（八十歳を越した老齢とて、やつとふみの肩にすがりつき歩くほど）を支へて入つてくる。

善子　お父様、珍らしいお客様がお出でになりましたよ。

北里　今客に逢つてゐるわけにはゆかん。用があつたら後にしてくれといへ。

善子　でもそのお客様がどうしても今直ぐお話がしたいと仰言るんですもの。

ふみ　先生、お久し振りでございます。

北里　あんたは誰ぢや。

ふみ　お見忘れでございませうか。相良ふみでございます。

北里　おう。さうぢやつた。どうしたのだ今時分。

知安　北里さんかな。儂は相良弘庵ぢや。新聞で今度のことを知つて、ぢつとしておれんのでな。出て來たよ。

北里　いやあ、どうも。それは……ま、お掛け下さい。栃木からわざ〳〵お出で下すつたのですか。

ふみ　どうしても連れて行けといつてきかないものですから。

北里　初めて、お目にかゝります。北里です。いろ〳〵御心配をかけて……。

知安　いや。そんな挨拶は抜きにして貰ひたい。年寄りは氣が短いでな、あんたは今から二十年前に私に學界へ再起しろといつて下さつた。新錢座のぼろ店で易者をしとつた頃だ。憶えてゐるかな。

北里　はあ。

知安　憶えてゐてくれゝば結構だ。どうだな、今でも儂をあんたの所で使つてくれるかな。

北里　……。と仰言ると？

知安　別に仔細はないぢや。儂ももう一遍仕事がしたうなつたのでな。

北里　しかし、御承知ないと思ひますが、今度私は此處をやめることに。

知安　それも分つとる。儂は今年八十一だ。二十年前なら六十一だ。今のあんたが丁度その年頃ぢやらう。二十年前の儂に再起をすゝめてくれたあんたが、今學界を退いてまさか隱居暮しもなさるまい。まさかさなさるまいと思つて頼つてきたのだ。

ふみ　先生。あの時先生は仰言つたぢやありませんか。相良弘庵を再起させるのはお國に對する自分達の義務だつて、今の先生にもそれが當るとお思ひになりませんでせうか。

知安　この研究所も長年辛苦してやつてきなさつたが今日では基礎も固いし、もう誰がやつても一通り仕事は出來る。しかし今は歐洲の戰爭が日本に迄及んで普通の時ではない。世界は學問の上でも一日も忽せに出來ん戰爭をしてゐるのぢや。あんたのやうな人が學者の戰場ともいへる研究所を去られることは國にとつて大きな損害といはなくちやならん。儂はあんたが此處を退かれると見たから取るものも取り敢へずやつて來ましたぢや。北里さん、もう一遍二十年前の、傳研を初めた

時に戻つて下さらんか。

喜多　さうだ。（近づいて）先生、やりませう。先生と奥さんと梅本君と三人で納屋を改造して緬羊の小屋をつくられたといふ、その頃をもう一度思ひ出しませう。

所員三　先生やつて下さい。北里研究所をたて〻下さい。

小森　お願ひです。私達をお見捨てにならないで下さい。先生。

北里　他の所員達も同じやうなことをいつて迫る。梅本一人、默然としてゐる。

（手を上げて）諸君。諸君……。諸君！　（といつて絶句し、大きなハンカチを出して鼻をかむ）

長谷川入つてくる。

長谷川　貴様は仕合せな男だな。これだけの人間にさう迫られちや、もう後へは退けんだらう。

北里　（やれ〳〵といふ風で）おい、富子。何とかいつてくれ。

富子　（諦めたやうに）仕方がありません。あなたはとう〳〵長谷川先生の立場をめちや〳〵にし、緒方先生と仲直りをなさる折りをなくしておしまひになりましたよ。

第五幕

第一幕に同じ。

大正六年三月。明るい眞晝。

富子と梅本入つてくる。

梅本　實際氣持のいいことつてものは何處から何處まで氣持よくゆくものです。先生も昨日は晝間から何度も〳〵さう仰言るんです、君大丈夫かねつて。何のことかと思つたらやつぱりお天氣のことなんですね。

富子　あの人ときたら、今度の事については、まるで子供のやうなんですよ。着てゆく洋服の事だの、つけてゆく徽章の事だの、常になく氣にいたしましてね。昨夜からすつかり枕許に並べてからでないと安心して睡れませんの。今朝は何時もより一

時間も早く起きてしまひましてね。

梅本　先生がそれぢや家中風が吹いてゐるやうでせう。

富子　風も風、暴風の方でね。ねえやなんか呆氣にとられてしまつて、へえんに遠くから珍らしさうに見てるんです。お風呂へ入つてから念入りにうがひを致しましてね、それから祝辭のお稽古ですよあなた。

梅本　餘程氣になるとみえますね。われ〳〵も一週間位前から一遍どほりはみんな拜聽してゐるんだから、隨分もう手に入つてゐる筈なんだが。

富子　おやさうですか。それぢやあ私に聞かせなかつたのは餘程思ひやりをき、せたつもりでせうか。

梅本　流石に奥さんにはきまりが悪いんぢやないですか。

富子　まさか、それほど内氣でもありませんでせう。（笑ひ乍ら床の軸を外し、緣の方へ持つて出ようとする）

梅本　あ、私やります。

富子　恐れ入ります。（と渡し、新らしい軸をかける。梅本は古い軸にはたきをかける）

富子　尤も始終いつてるんでございますよ。子供の時分に四書五經や國ぶりの勉強をさせられたが、自分は劍道や水泳の方がずつと興味があつてすつかりそつちは怠けてしまつた。この頃他所へ行つて字を書かされたり文をつくらされたりする度に、やつぱりあの時分にも少し氣を入れてやつておけばよかつたと思ふなんて。

梅本　先生はあれでいいんですよ。喧嘩も文章も兩方うまいなんて、そんないいことはありません。

富子　まあ梅本さんも此の頃は仲々はつきり仰言ること。

（二人笑ふ）

貞子入つてくる。（大丸髷の健康さうな大女）

貞子　あら、あんたこんな所におゐでやしたんどすか。何處へお行きやしたのかと思ふて探してましたのどすがな。まあま。奥さん、先日は御無禮いたしまして。

富子　いらつしやいまし。その節はいろ〳〵御雜作になりまして。

貞子　いいえええあんたはん、何にもお構ひもしませんでゆきとゞかんことでございましたぇ。又今日は私共のやうなものまでお招きいたゞきまして、おほきに有難うさん

でございます。

富子　お招きといふやうなことちやございませんよ。ま、ほんの氣持のお祝ひといふほどのつもりで……今度のことについては梅本さんが一番骨を折つて下すつたのですから……。

貞子　いいえ。うちの人はなんにもあんたはん。まあ、ああして長い間御厄介になつてゐながら自分だけひとり大學の方へ行つてしもふたんどすよつて、こんな時でも使ひ走りくらゐさせて貰はんとなあ。なにせこちらの先生と大學の緒方先生の間いふものは世間ではまるで、犬と猿とのやうにいふてゐますよつてになあ。今度のことが知れたら世間でもそんな阿呆らしい誤解はもうせんようになります。ほんまにええ工合どすわ。なああんた。

梅本　う……うん。

貞子　それでも流石に北里先生やと思ふて私感心いたしてをります。そりや昔は緒方先生から教へてお貰ひになつたことがおありどしたやろけど、今ではあんたはんこちらの先生いふたらもう、世界的のお人どすやろ。そのお方が生徒の總代になつ

て祝辭をお讀みになるなんてなんちうお心の廣いことやろと思ひましてなあ。感心してますのどすえ。

富子　きあどうしませうねえ。上方の方はお口がお上手だから……。

貞子　あら奥さん、私は何もお世辭のつもりでいふてるのやあらしません。ほんまにさう思ふて、うちでもいふてるのどすえ。（梅本に）さうどつしやろあんた。ねえ。何とかいふとくれやすな、そないに默つて笑ふておいやさんと。

梅本　ああ。お前のいふことはほんとだよ。ほんとだが、さうほんとのことをいつてしまつちややつぱり奥さんがお困りになるよ。（さういつて奥へ入つてゆく）

貞子　ああいふ愛想のないことといふて、なんちうひとどつしやろ。學者なんちうもんは何方もああいふけつたいな所があるもんどすやろか。

富子　そんなことを仰言ると罰が當ります。お互に二十五年もの間、心ひとつにつながつて、今日の爲めに生きていらつしたのぢやありませんか。

貞子　へえ。そらさうどす。私かてその間にはほんまに人にはいへんやうな辛い日もおしたえ。けどなあ、折角ここ迄辛抱してきたんやよつてにと思ふとつい……それ

でもお父はんがぽつくり死んでしまわはつたらなんやしらん生きてゐる張りみたいなもんがすぽつと抜けてしもふたやうでくた〳〵になつてしまひましたわ。

富子　そりやねえ。大抵のことぢやなかつたらうと思ひますよ。そんな風にひとすじの心で御一緒になれる夫婦つてものはさういくらも例のある話ぢやありません。羨ましいと思ひますよ。

貞子　ところがさうやないのどす。これがそれほど長い間願ひに願ふて來た暮しかと思ふと私はどうしてもこの頃の暮しが腑に落ちん氣がするのどす。四時になると學校から歸つといでやすやろ。此方があれもしてこれもして、ちよつとでも喜んで貰はうと思ふてちんと仕度して待つても音も沙汰もおへん。大抵しびれをきらしてしまひますわ。もう諦めた時分にひよこつと戻つて來て、いふことがよろしおすやろ。つい仕事に氣をとられて時間をうつかりしてたもんで。それだけどす。すまんとも氣の毒ともなあんとも。

富子　そりや、あの方は大體が口數の少い方ですからね。

貞子　私もああいふ人やとは思ふてゐるのどすけど。やつぱりたまには他所の旦那さんのやうに世間話しもしてほしうおすし、家の相談にも乘つてほしいと思ひますわ。さういふことがまるでないのどすよつてになあ。あれで一年中一體何を考へて暮らしてはるのかしらんと思ふくらゐどつせ。

富子　あの長い間歌を遣取りなすつた頃のことを思ひ出してごらんなさいまし。あの方が一年中何を考へて暮してらつしやるのか、一遍にわかるぢやありませんか。

貞子　まあ奥さん。そんな御冗談どころやおへんのどすえ。ほんまに私、一遍奥さんにとつくり聞いていたゞきたいと思ふてるのどすがな。今から考へてみるとあの二十五年が嘘か、今の暮らしが嘘か、自分で自分がわからんやうな氣がしてるのどす……。

善子　善子、座布團を五六帖重ねて入つて來る。

善子　やつぱりかういふことは何處かの御料理屋さんに持つて行つた方がよかつたんぢやないかしら。みんながばた〳〵してくたびれるだけでその割に效果は少いのよきつと。

貞子　ああ、お嬢さん。うつかり話し込んでしまふて一向御手傳ひもしませんで。

善子　よろしいんですよ。どうせ誰も何をどうしていいかわからないで右往左往してるんですもの。お母さん、お膳はこちらへみんな並べていたゞくのですか。

富子　いえ。二階ですよ。八疊と十疊の襖を外してあすこへ並べていたゞくやうにいつてあるんです。

善子　あらさう。それぢやこれは二階へ持つて行かなくちや。

富子　あゝ、こゝへも少し置いといて貰ひませう。いきなり皆さんを二階へお通しするわけにもゆかないでせうから。

善子　さうですか。やれ〳〵、私は駄目なんですよ。かういふことは、ああしてからしてなんて考へるだけでもうかつとしてしまふの。

貞子　そらさうでございますとも、お嬢さんなんかふだんなんにもお家のことをなさらんでえゝ御身分どすよつてに。

善子　さうぢやないんですよ。たゞ意氣地がないんです。

梅本出てくる。

梅本　貞子。貞子。そこで腰を据ゑてないでお勝手を少し手傳つたらどうだい。相良さ

んだけぢや手が足りないやうだ。（入る）

貞子　はい〳〵。只今。

富子　あなたよろしいんですよ。もう大して仕事は殘つてゐない筈ですから、ぼつ〳〵皆で……。

貞子・いいえ。どうせ私が行つたかて大したことは出來へんのどすえ。却つて足手まとひになるくらゐで。ああ嵌いこと。もうこんな羽織では暑いやうどすた。今年はちよつと陽氣が早いのどすやろか。（去る）

善子　梅本さんの奥さんつて話に聞いて想像してゐたのと實際にお逢ひしたのとすつかり違ひますのね。あれがあの歌をお詠みになつたとはどうしても思へないわ。

富子　あの方はいい方ですよ。私達は長い間その人を見ないで自分々々が勝手な人を頭の中で造り上げてゐたのだもの、それと御本人と違つたからといつてあの人の所爲ぢやありませんよ。

善子　そりやあの人の所爲ぢやありませんわ。でもあの方の歌からあの方の姿を想像出來なかつたとしても私達の所爲ぢややつぱりないと思ひますわ。

富子　御本人達は初めから不思議でもなんでもないんですからね。さういふものです
よ。人と人との間には理窟や憶測では量りきれないものがあるんですよ。面白い
ものですよ。

研究所員一、喜多。

所員一　やあ。奥さん只今。

富子　お歸りなさいまし。

所員一　成功々々。大成功ですよ。「緒方先生並に御家族御一同、閣下並びに諸君。本日
緒方教授の在職二十五年記念祝賀會に當りまして門下生を代表して玆に祝辭を申
述ぶることは、私の最も名譽とする所でございます。」

善子　伺ひたかつたわ。お父様がさう固くなつてお話しなさるところを。

喜多　ところがさう固くなつてもゐないのですよ。途中から壇の上をぶら〳〵歩き出し
たりしましてね。笑つてしまひましたよ。

所員一　いや〳〵。あれでいいんだよ。大學生が祝辭を讀むんぢやなし。天下の北里だ。
しかし「御家族御一同、閣下並びに諸君」は餘計だ。ああいふ文章はどつちかと

いへばうまくないね。

皆、笑ふ。

長谷川、入つて來る。

富子　あら。お迎へにも出ませんで。お疲れでございましよ。此方へどうぞ。いえ、そ
こぢや端すぎます。どうぞ此方へ。

長谷川　いや〳〵、端も眞中もない。どつこいしよ。あ、あーつ。（と伸びをする）

北里　（せか〳〵と入つてきて）富子。梅本は此方へ來とらんか。

富子　お歸りなさいまし。みえてます。

北里　彼奴、なんだつて會場の方へ來んのだ。おーい。梅本。梅本！

善子　私呼んで來ます。（去る）

富子　大變御立派な演說だつたさうで。

北里　あーつ、ははは。そりやお前立派なのは當り前さ。お前達にも聞かせたいくらゐ
だつたぞ。俺は他所行きの言葉は下手だと思つとつたがあれで滿更捨てたもので
はないわい。なあおい。

長谷川　う……ふふふ。どうも獨り自慢の讃めてなし、といふ奴かね。

北　里　そんなことをいふが、貴樣だつていやに神妙らしい顏をして謹聽しとつたぢやないか。

長谷川　いや。俺は昨夜少し遲く迄仕事をしてゐたもんで今日は睡くつて〳〵仕樣がないんだ。睡つちやいかんと思つて氣を張つてゐるとつい、あゝいふ顏になるんだ。

北　里　なんだい。つまらないことを家族の居る前でいふな。

喜　多　しかし實驗醫學論になつてからは流石に本領を發揮しましたよ。持ち直しましたね。

北　里　こら。持ち直したとは何だ。

所員一　しかしねえ、親爺「緒方先生並に御家族御一同、閣下並びに諸君」といふのはまるで獨逸語の手紙の飜譯をしてゐるやうでおかしい。それに「綺羅星の如く御列びになつて居らるゝ碩學鴻儒の諸先生」とはなんですか。全然講釋師口調ですよ。なつとらん。

富　子　それぢやまるで型なしぢやありませんか。あなた何とか仰言いまし。

北　里　いやどうも、日本人と云ふ奴の惡いくせで目の前で讃めると何かお世辭をいつてるやうにとられやせんかと案じて、却つて思つてもをらん惡口をいふもんだ。あんなことをいふとつても心中では大いに感服しとるんぢやよ。

所員一　うあ。たまらん。どうも、かういふのにかゝつちや齒がたゝん。（立ち上つて）水を一杯。

富　子　私もつて……。（とついてゆく）

所員一　よろし〳〵。（二人入る）

入れ違ひに、梅本。

梅　本　お歸りなさい。

北　里　どうしたんだ君。君が今日の會場へ現はれんといふ法はないぢやないか。

梅　本　私は、お膳立てだけすれば後は別に用はないのですから。

北　里　そんな莫迦な話があるか。大體今日俺に出て、門弟總代の祝辭を讀まんかと話を持つて來たのは君ぢやないか。その肝腎の君がをらんぢや俺は會場へ入つて何處へどんな風に挨拶に行つていいのかてんでわかりやしない。まご〳〵しちまつた

ぞ。

長谷川　なに。それでいいのさ。折角これ迄の變てこなものをとつ拂ふのに手引きだの介添役だのがゐたんぢややつぱり同じことだ。いきなり張本人同志をぶつつけるのが一番いいのだ。元々本人同志は何でもない。取り卷きだの世間だのがわい〳〵騒いでこんなになつちまつたんだからな。

梅本　緒方先生はお喜びでしたらう。

北里　ああ。喜んでくれたよ。久し振りで衛生局時代の話が出てな、すつかり昔を思ひ出してしまつた。緒方さんと俺とは妙な因縁があるんだ。大體あの人がヨーロッパへ行つて居られた時の先生といふのがミュン、ヘン大學のペッテンコーヘル教授でな、この人が俺の先生のドクトルコッホのコレラ菌病原説に異説をとなへて、自分でコレラ菌をのんでみせたりしとるんだよ。そのお弟子の學説に今度はコッホ先生の門弟の俺が異説を出して世間の話題になつたりするのはどうも、よくよく變な廻り合せだといつてね。二人ですつかり笑つてしまつたよ。

長谷川　まあしかし、大學と貴樣とが仲違ひしとつたお蔭で日本の醫學界は餘程活氣が出

とつたし、實績が上つたともいへるさ。

北里　なにが倖せになるかわかつたもんぢやないなあ。あつつはは。

富子　富子出て來る。

それぢや、早速でなんですけれど、ちよつと皆さん二階の方へ行つていたゞきませうか。

長谷川　あ。なんですか。

富子　何といふほどのことでもないのですが、北里の氣持ちだけでちよつとお口よどしに……。

長谷川　あ、そりやいかん。さういふ御心配は……。

富子　いえ。今日のは氣分のことでございますからさう仰言らずに。

長谷川　さうですか。そらあすまんな。

北里　ん。ぢや、むかうへ行かう。（立ちかゝる）

喜多　先生。その前にちよつと……お話したいことが……。

北里　ち。何だ。（座る）

喜多　實は、この間から三四回慶應義塾の鎌田塾長に逢つたのですが……。

北里　……。

喜多　今度義塾の創立六十年記念の事業として醫學科を新らしく造りたいといふお話なんです。

北里　それで？

喜多　それで、その第一代の醫學科長を先生にやつていたゞきたいと仰言るのです。

北里　（ちよつと不機嫌に）君は何の資格でそれをいふんだね。

喜多　内意を伺つてくれとたのまれたのです。正式には無論塾長なり他の人なりがみえるでせう。その前の工作をしてくれと依頼されたといつた方が當つてゐるかもしれません。

北里　とすれば、今日その話をいひ出したのは失敗だらう。

喜多　さうですか。私は帝大との經緯がすつかり無くなつた今日だから丁度いい機會だと思つたのですが。

北里　俺に教師がつとまるくらゐなら傳研について帝大へ行つとるぢやないか。世間の

誤解を敢てして迄傳研を去つたのは俺の醫學に對する行き方が學校流でないからだ。俺に教師がつとまらんことがわかつとるからだ。

喜多　しかし、あの場合は先生を學者として迎へたいといふのでなくて、傳研の所屬を變へる附隨的な事項として人間の問題が出て來たのです。それにちやんとした組織のある所へ後から入つてゆかれるのではそれはいろ〳〵考への相異といふものも起るでせうが、今度の場合は全然新らしいのです。すべて先生の思ふまゝに造り上げることが出來るのです。

梅本　それに、慶應義塾といへば福澤先生の起された所です。先生も福澤先生とは一通りの間柄でないのですから。

喜多　さうなんだよ。（北里に）大學の場合は事情が事情でしたから、私は先生の御行爲についちや一言も口を差出さなかつたつもりです。それだけに今度の場合は私としても是非やつていたゞきたいと思ふのです。お願ひします。

北里　そりや、俺は福澤先生には一方ならんお世話になつとるよ。一日だつてそいつを忘れたことはありやせん。御恩返しの出來ることなら何でもやりたいと思つとる

が、今俺が慶應の醫學科長になんぞなつてみろ。あいつは結局お山の大將になりたい爲に大學にこれまで逆らつてきたのだ。頭をおさへる者のおらん所へなら一遍に尾を振つて行つたと他人は言ふだらう。厭だよ。

長谷川　と、なにか。貴樣は自分がいい子になりたい爲に福澤先生の年來の恩義に報ゆることも出來んといふのか。

北　里　いや。さういふことはないが名分が立たん。とにかくそんな話は又のことにしてくれ。（立ちかゝる）

長谷川　まあ待て。今日でなくつたつてどうせする話なら今日、俺のゐる前ではつきり貴樣の考へを聞かうぢやないか。

北　里　いやに熱心だな。貴樣も何か、この件について一役買つてゐるのか。

長谷川　いや。別に頼まれたわけではないが、福澤先生が初めて貴樣の爲に傳研を建てゝ下さつたのは、決して貴樣が可愛い爲でも貴樣の學才を惜しまれたからでもない。たゞ貴樣の持つてゐる能力を日本の爲に思ひ切つて發揮させようとお考へになつたのだ。そりや貴樣だつてわかつてるだらう。今日慶應義塾が醫科を開設す

るに當つて北里を科長に迎へたいといふのも又福澤先生のさう云ふ精神を繼承してのことだらう。とすればその、世間がどう思ふとか大學でどう解釋するとかいふことはとるにたらん話ぢやないか。

北　里　いや。そりや理窟はさうかもしれん。しかし何も今日、折角緒方さんと笑つて別れていい氣持でゐる時にその話をしなくてもいいぢやないか。

長谷川　ぢや、他日なら文句なしに承知するのか。

北　里　さうは行かんよ。

長谷川　そらみろ。だから今返答しろといふのだ。

北　里　くどいなあ。

長谷川　どうしても厭か。

北　里　厭だ。

長谷川　北里。庭へ出ろ。

北　里　何？

長谷川　庭へ出ろといふんだ。貴樣昔はさうふやけた性根ぢやなかつた。世間だの思惑だ

の、女のくさつたやうなことをいふやうになつた老ぼれの眼を一遍さませてやる。

北里　面白いな。貴樣に俺が殴れるか。俺は栃原助之進門下の四天王だぞ。

長谷川　高慢は後でいへ。出ろ。

北里　よろし。

梅本　先生、駄目ですよ。

長谷川　いや。君達は構はんでくれ。

喜多　いけませんよ。奥さん。何とかいつて下さい。

富子　（泰然として）ふふふ。まあよろしいでせう。たまにお相撲どつこも氣が變つて。

北里　さうだ。俺の相撲は常陸山の直傳だ。貴樣達に鮮かな所をみせてやらう。（上衣を脱がうとする）

喜多　冗、冗談ぢやありませんよ。そのお年でもしも怪我でもなすつたらどうなさるんです。

梅本　それに長谷川先生は血壓が高いんでせう。いけませんよ。

長谷川　血壓か。うーん。（とひるむ）

富子　（北里に）あなたも、どうせお引受けになることをどうしてさう勿體をおつけになるんですかねえ。

北里　莫迦をいへ。俺がいつ引受けるといつた。

富子　だめですよ。いくら厭だとか、引受けないと仰言つてもあなたといふ方は、新らしい仕事といふと結局やつてみないではゐられない人なんです。それなら初めから素直に承知しましたつて仰言る方が世話が燒けないだけでも周圍が助かりますよ。

北里　（座りつゝ）俺も今年は六十五だ。自分の研究所の仕事の他に新らしいおもちやの要る年でもないさ。

富子　雀は百迄と申しますからね。あなたといふ方は、死ぬ迄何か仕事をしてゐなくちやゐられないんですよ。周圍で引とめても、自分で止さうとお思ひになつても、何れはなさるんです。

長谷川　ふん。亭主よりも妻君の方がよつぽど悟りをひらいてゐるわい。

北里　なあに、それも俺が永年飼ひならして仕込んで來たからだ。

富子　あんな負け惜しみを仰言る。

長谷川　女房に手前の腹を讀んで貰つて威張り返つてゐりや世話はない。

北里　しかし、なんだぞ。醫科を開くといつても專門學校なら五十萬圓、大學の醫科なら百二十萬は要るぞ。それだけの準備が出來るのか。

喜多　先生が引受けて下されば他のことは一切先生の註文通りにすると申して居られました。今迄私學に醫科のある所はなかつたのですから、その意味でも第一流のものにしたいといふ意氣込みらしいです。

北里　うむ……。（言葉に一寸つまつてしまふ）

貞子　貞子入つてくる。

さあさ、皆さん。どうおしやしたの。早うお二階へ行つて貰はんと折角のお料理が冷めてしまひますがな。

長谷川　ああ、さうか〳〵。そいつをうつかり忘れるところぢやつた。さ、皆ゆかう。

（北里に）おい。ぼんやりしとらんで來い。

北里　よーし。ゆかう。（と立上り）ん。俺あ、こいつを着換へてゆくから一足先に初めとつてくれ。喜多。鎌田君には、北里が承知したといつておけ。

喜多　は。

長谷川　承知するもせんもあるものか。やるに決つとるんだ。ははは。

皆、出てゆく。富子、着物を持つてきて北里の着換へを助けてやる。

北里　あ。いいよ。……（と着換へながら）ああ。この年になつて、又學校の教師をやるのか。大變だぞう。

富子　別に、毎日講義をなさるわけではないのでせう。

北里　そりやさうだがな。

富子　迷惑さうなことを仰言つて、もうそろ〳〵計畫をたててゐらつしやるんぢやないのですか新らしい。

北里　（苦笑して）莫迦をいへ。

富子　どうですか。專門學校なら五十萬圓、大學なら百二十萬圓なんて數字がすぐ出てくる所をみますとね。

北里　そりやお前外國の例からみて、ごく穩やかなところをいつてみたのだ。どうも俺は、お前にかゝつちやすつかり信用がないとみえるなあ。

富子　いままで、さん〳〵その手を喰つてきましたからね。でもまあ、なんですよ。さうなされば亡くなられた福澤先生に御恩のいく分かでも返せると申すものです。さうとでも思つておやりになるのですね。

北里　……。おかしなものだよ。俺は一體子供の時分から醫者と坊主にはどうしてもなる氣がしなかつたのだ。それが、どういふもののはづみか醫者になつちまつた。それも初めは臨床の醫者になるつもりでゐたのが、衞生局へ入つて緒方さんの指導をうけたのが緣で細菌學なんてものの方へ行つちまつてさ。おまけに手ほどきを受けた緒方さんとはまづくなるやうなことをしでかした。俺は決してそんなつもりでやつたのではないんだが結果がさういふ風になつてくるんだ。やつと大學と仲直りが出來たと思つたら今度は又私學校入りだ。傳研をやめる時俺は、學校は俺にむかんと自分でも考へ世間にもいつちまつたんだからなあ。考へてみると俺の一生つてものは、自分でやりたくないと思つたことばかりしてきたやうなも

のさ。

富子　でも、あなたは何をやるにも眼の色を變へて、結構一生懸命やつておいでになりましたよ。

北里　さ。それだからをかしいんだよ。世間ぢや俺のことを賣名家だとか、政治家だとかやりてだとかいつとるさうだが、俺は何時だつてしかけたことは一心不亂にやつてきた。その他には何も考へてゐないんだから……。

富子　だからそれでいいぢやありませんか。今更いい子にならうなんてつまらない慾をお出しにならないで。

北里　おい〳〵。まるで禪坊主みたいなことをいふぢやないか。いつの間にお前はそんな悟りを開いてしまつたのだい。

富子　(笑つて)私も初めの間は、調子がわからなかつたものですからね。いろ〳〵心配もしたり焦つてもみたりしましたよ。でも長い間あなたの後からえつさ〳〵と駈けてゐるうちに、この頃はあなたのなさることがちつとも氣にならなくなつたし、あなたのいい所もどうやらわかつてきましたね。……少し遲すぎたかもしれませ

んが、やつと追ひついたといふところですか。

北里　いやあ。追ひついたどころぢやないだらう。追ひ越しちまつた形かもしれん。

富子　ほつほ……。それでもやつぱり困りますねえ。

北里　どうも女と云ふものは怖いものだ。此方で手綱を握つてゐるつもりが、いつの間にかあべこべに鼻面をたゝかれてゐたりするんだからなあ。

富子　面白いものですよ、夫婦といふものも。梅本さんの奥様のやうに、あんなに長い間思ひに思つて一緒になられた方が他人の顔をみると旦那様の愚痴をいつてられるし、私のやうにおいてけぼりに逢やしないかと焦々してきた人間が今頃になつて旦那様の有難味がわかつてくるなんて。

北里　なーに。梅本の家は、あれで結構圓滿に行つとるんだ。あの細君は、ああいふ人間なのさ。

富子　そりやさうなんでせうねえ。あれで普通なんでせうねえ。

善子入つてくる。

善子　お父様。皆様、お父様がお出でになる迄といつて待つていゐつしやるんですよ。

北里　おお、そりやいかん。（立ち上つて）ぢや、お婆さんや。同行二人でゆきますかな。

富子　参りませう。まだ〳〵こんなこつちやいけません。

北里　はい〳〵。まだ〳〵こんなこつちやいけません。あつははは。

善子　まあ。なにがいけませんの。

北里　いや。なんでもない。ちよつと母さんにお説教を喰つたんでなあ。なあ。はつは……

富子　ほつほつほ……。

と、明るく笑ひながら二人さつさと入つてゆく。善子もわけはわからないながらついつり込まれて笑つて見送る。

出版警察承認ラ三一〇一一四號五〇〇〇部
印刷 昭和十九年十月十日
發行 昭和十九年十月十五日

「怒濤」

㊟定價 壹圓五拾錢
特別行爲稅相當額拾錢 合計壹圓六拾錢

著者 森本薫 發行者小山久二郎
東京都麹町區飯田町二丁目十一番地
印刷者大杉直治東京都牛込區若松町
五十四番地 製本責任者山田五郎東
京都神田區鎌倉町二十五番地

發行所 小山書店
東京都麹町區飯田町二丁目十一番地
電話九段(33)〇三五二番
振替口座東京三九八七二
(會員番號第一〇五〇一五號)
(印刷大杉印刷所(東京五六)
製本小山書店專屬製本工場)

配給元 日本出版配給株式會社 東京都神田區淡路町二ノ九

1908
12
912.6
M059
2.

終